

特集にあたって

平等 文博

本号は、人間科学部を巣立つ学生の卒業論文特集とした。二〇〇二年に人間科学部が開設されたとき、準備の過程で学部カリキュラムについて検討が重ねられたが、その時の「こだわり」の一つが「卒業研究は必修」であった。当時、他学部はどれも卒業研究は必修でなかった。必修ということはもちろん、卒業論文が書けないと卒業できないということである。卒論の可否判断がゼミ指導教員に任ざれているとはいえ、論文であるからには最低限の質と量が求められるのは当然である。書けずに留年する学生が何人も出てきたら……、と心配する声もあった。

その心配がまったくの杞憂だったと言いつてもいい。卒業研究のテーマ探しから始まり、問題も確かにある。卒業研究のテーマ探しから始まり、問題

意識の掘り下げ、研究資料や参考文献の検索、ゼミでの発表とディスカッションなど、手間暇かけてようやく卒論下書きの提出に至っても、日本語としての文章添削、論理展開や論証等の不十分点の加筆修正、論文作成の基本ルールの徹底といった仕上げの指導に忙殺される。ダメ出しされて何度も草稿に手を入れる当の学生にとつても、卒論作成は最後の大きな試練だろう。

けれど、教師と学生の真剣な応答体験の通過を卒業の必須要件にしたことは、大いに意味があったと思う。「しんどかったけど、卒論を書いてよかった」という感想を学生から聞くと、教師としても嬉しく思うし、若い学生諸君が毎年持ち込んでくる新しいテーマや問題関心から、教師の側もよい刺激を受けている。

このように、一つひとつの卒業論文には、人間科学部で各学生が学び考えたエッセンスが詰まっているとも言える。以下に掲載するのはその一部であるが、味読いたければ幸いである。

(人間科学部教授)



第1期生からの卒業研究論文集（平等ゼミ）

野球におけるイップス症状と性格特性の関係

廣瀬 健也

1. 問題と目的

私は高校時代、野球部に所属しており、内野手を守っていたが、送球ミスをしてはいけないという恐怖心から、送球が思うようにできなくなる“イップス”と呼ばれる症状にかかってしまった。送球に対して恐怖を抱くようになり、送球動作に入ると、また送球ミスをしてしまうのではないかと不安にかられていた。また、ひどい時には一〇メートルにも満たない距離でのキャッチボールでも相手にボールが届かないこともあった。私は周囲からイップスだと指摘され、自分がイップスであることを自覚した。当時の私は、イップスの原因を技術的な問題と考えており、キャッチボールで送球フォームを

改善する練習ばかり行っていた。しかし、症状が改善することはなかった。

大学で、スポーツ心理学について学んだ際にイップスの原因が精神的な問題であることを知った。イップスとは、外部からのプレッシャーや自分の中で生じるプレッシャーにより、普段はできている運動動作ができなくなるという症状である（イップス研究所³⁾）。イップスという言葉はゴルフから生まれ、狭義の意味としては、練習では何でもない一〜二メートルほどのパットが、試合になると緊張のあまり震えて打てなくなる、あるいは筋肉が痙攣してカツンと強く打つてしまい、はるかにカツプをオーバーしてしまうことをいう。また、広義の意味としては、アプローチ、バンカー、アイアン、ドライバー

にいたるまで、緊張のあまり身体が硬くなつてうまく打てなくなることを意味する(田辺, 2001)。イップスは、ゴルフや野球といったスポーツ以外にも、サッカーやテニス、ダーツ等にも症状が現れる(イップス研究所)。

イップスという症状の名前は、プロゴルフファーマー・アーマー(1896-1968)によって名づけられた。また、イップス(YIPS)という単語は、うめき病という意味である(田辺, 2001)。

イップスについてインターネットで調べていると、イップスと性格の関係についての先行研究が存在した。先行研究では、中学生三〇名、高校生二七名、大学生二四名の計八一名を対象にアンケートとY・G性格検査用紙をセットにして調査を行った(棚橋, 2007)。その結果、八一名のうち二七名にイップスの経験があり、イップス経験者は未経験者に比べて、社会的外交性が高いため、他人の目を気にし、マイナス思考に陥つてしまうことが原因でイップスになつてしまうと述べている。また、自分のプレーに対して責任感が強いがゆえに、失敗を深刻に受け止め思い悩んでしまうような選手がイップスになりやすいのではないかと報告している。

また、イップス治療を行っている、ボディバランス整
体院の殖栗は治療を行う際に、アメリカの精神科医エ
リック・バーンが創案した「交流分析」の理論を導入し
ている。交流分析では、自分の性格の自己状態をCP、
NP、A、FC、ACの五つに分類し、各自状態の尺
度を測定する。その結果から、自分の思考、感情、行
動パターンを分析するものである(野村, 2006a)。C
P (Critical Parent) は、父親的な役割を担う批判的
な親の自己状態を表す。NP (Nurturing Parent) は、
母親的な役割を担う養育的な親の自己状態を表す。A
(Adult) は事実に基づき、物事を客観的かつ論理的に
理解し、判断しようとする自己状態である。FC (Free
Child) はもつて生まれた自然な姿である自由な子ども
の自己状態である。AC (Adapted Child) は親の影響
を順応した子どもの自己状態である(佐々木, 2006)。
殖栗は、イップス患者にはNPとACの尺度が強く示さ
れると述べている。NPは母親的な自己状態で、保護的
かつ心が優しいので思ったことが言えないといった依存
的な面がある。ACは自己否定が出ると失敗し、のちに
強く恐れる傾向がある(殖栗, 2010)。

本調査では、先行研究で報告されたように、イップス経験者は、他人の目をよく気にする性格や責任感が強い性格の選手がイップスになりやすいのか、また、殖粟が報告したように、イップス経験者は、NPとACの尺度が強く出ることかを検討するために、高校球児を対象に、イップス症状に関するアンケートと五つの自我状態を測定できる新版TEGIIをセットにして調査を行った。

2. 方法

被験者

高校生八二名（男性八二名、平均年齢17.16±0.81歳）が調査に参加した。

質問紙

自我状態を測定するテストとして新版TEGIIと、イップス経験の有無や具体的なイップス症状を聞き出すアンケート用紙をセットにして調査を行った。新版TEGIIへの回答方法は、一〇五二の各質問項目に対してそれぞれ、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の中から自分自身にあてはまるものを選んでもらう。尚、解答

後はこちらで結果を算出し、エゴグラムを作成する。アンケートではまず、被験者の学年、野球の経験年数、主に守っている守備位置、イップス経験の有無を回答してもらう。次にイップス経験者には自由記述式で、イップスを経験した時期と具体的な症状、イップスになったきっかけとその時の守備位置、克服方法について回答してもらう。

手続き

あらかじめ、野球部の監督さんに本調査の内容を説明し、新版TEGIIとアンケート用紙の調査セットを人数分渡した。その後、監督さんから部員に本調査の説明してもらった上で調査セットを監督さんから部員に渡した。部員は一度自宅に調査セットを持ち帰り、回答後、監督さんに提出し、その後に調査実施者が回答済みの調査セットを回収した。

実施日時

二〇一三年（平成二五年）六月下旬に調査を実施した。

3. 結果と考察

(1) イップス経験の有無

イップスに関するアンケートを行った結果、回答のあった八〇名中（二名はイップス有無の回答なしであったため除外）、二一名にイップス経験がみられた。イップス経験者が予想以上に多かつたことに驚いた。また、イップス経験者の中には、イップス症状を克服した選手が一六名、現在も症状が続いている選手が五名存在し、予想以上に克服した選手が多かつた。

(2) イップスの具体的な症状

結果

具体的な症状は下記の通りである。

- ・ 自分の思ったところに投げることが出来ず、投げることがこわくなった
- ・ 捕手から投手に返球する際、肘を抜いて球が抜けたり、腕を振ると引つかかり、とんでもないワンバウンドを投げてしまう。どう投げたら良いかわからなくなる状態。頭で考えてしまつて、普段でできることが全くてできず、力の入れどころや近い距離の投げ方などが分からなくなる。心の中で投げられないとすぐ思つてしまう
- ・ 比較的遠い距離の送球は問題なくできるが近距離になると送球が不安定になる
- ・ 近距離の送球ができない（同じ症状の選手が二名）
- ・ ボールが投げられなくなった
- ・ ボールを投げる瞬間に指にかからず抜けたり、反対に指にひつかかつたりする
- ・ 外野からカットマンへの送球ができない（同じ症状の選手が二名）
- ・ 送球時にランナーが見える力が抜けてしまう
- ・ 感覚を失い、腕が振れなくなり、投球フォームを崩してしまつた
- ・ 腕が縮こまる
- ・ 体が思うように動かない
- ・ 自分が投手の時、打者が立つとストライクが入らなくなる
- ・ バッティングピッチャーをしていたら、急に腕が振れなくなりコントロールが定まらなくなった。しかし、バッティングピッチャーの時以外は正常である

・遠投などは投げられるが、バッテリー間の距離を投げようとする、相手の所に上手く送球できない（同じ症状の選手が二名）

・ゆるいボールを投げられない

・ボールが上に抜ける

・極端に引つかかったり、抜けたりして、投げるのが少し怖い

・バッティングピッチャーをしていたら、急に腕が振れなくなりコントロールが定まらなくなつた。

しかし、バッティングピッチャーの時以外は正常

考察

全ての回答が送球に関する症状であつたことから、野球においてのイップス症状は送球に問題が起こる可能性が高いと考えられる。

近距離の送球や外野からカットマンへの送球、バッテリー間の送球が不安定になるという回答から考えられることは、送球イップスになると短い距離で細かいコントロールを必要とする送球が困難になることである。相手の捕球しやすい所にコントロールしようと過剰に思つてしまい、そこで、送球ミスをする、更にコントロールを

意識するようになる。その結果、投球フォームを意識しすぎてしまい、本来の自然なフォームを崩してしまうのである。反対に「遠距離での送球は問題なくできる」という回答から考えられるのは、遠距離の送球には細かいコントロールが必要ないということである。遠投では、遠距離にいる相手に送球を届けることが目的になるため、コントロールへの意識は少なくなる。送球を届けるために、助走を付けて体全体を使つて送球を行うため、自然な投球フォームでの送球が可能になり、問題なく送球できると考えられる。

「送球時にランナーが見えると力が抜けてしまう」、「ピッチャーでバッターが打席に立つとストライクが入らなくなる」、「バッティングピッチャーの時だけ腕が振れず、コントロールが定まらない」という回答は、特定の環境に置かれた場合の時だけ送球ができなくなるという症状である。他の場面においては正常に送球できるが、特定の環境に置かれた場合にのみ、普段でできることができなくなつてしまうのは、自分がこれから行う動作に対する失敗の不安から起こる予期不安が身体動作に影響を及ぼしていると考えられる。予期不安が身体動作を硬直

させ、自然な投球フォームを崩してイップスになると考えられる。

(3) イップスになつたきつかけ

結果

イップスになつたきつかけは下記の通りである。

- ・試合で暴投を投げてから送球が怖くなった(同内容の回答が二名)
- ・しつかり投げないといけないと思ひ過ぎた(同内容の回答が二名)
- ・先輩の足を引つ張つてはいけないという思ひから投げ過ぎていた
- ・練習時にバッティングピッチャーをしてから(同内容の回答が二名)
- ・小学生時、ショートを守つていて送球ミスをして試合に負けて怒られた
- ・骨折してから
- ・自分が一年生の時、打撃練習時に自分はキャッチャーをしており、打撃投手が三年生だった。打撃投手の周囲には、打球から身を保護するネット

が置かれていて、キャッチャーから打撃投手に返球する際には、ネットの位置関係上、非常に狭い場所に投げる必要があつたため、ボールを置きにいくように投げることを繰り返していた結果、イップスになつた

- ・ピッチャーで先輩に死球を当ててしまつてから
- ・送球ミスをしてしまひそうで怖いから
- ・恐ひ先輩に送球するのが怖かつた
- ・セカンドゴロを捕球後に一塁に送球する際、力が抜けてしまひ暴投を投げてしまつた。そこから送球することが怖くなつた
- ・投げ方が分からなくなつた
- ・先輩方にすぐく注意をされてから
- ・高校に入つてから
- ・原因はわからない(同内容の回答が二名)

考察

回答結果の全体を通して、外部からのプレッシャーや自分のなかでのプレッシャーによつて送球に対する不安が生じ、その結果イップスを引き起こすケースが多いと言える。

「試合で送球ミスをした」や「先輩の足を引つ張ってはいけないという思いから」などの回答結果からは、自分の犯した失敗がチームや先輩に迷惑をかけてしまったと捉えてしまい、その責任を感じて送球に対しての予期不安が芽生えてしまったと考えられる。

「バッティングピッチャーをして」や「恐い先輩に送球することが怖かった」などの回答からは、相手からどう思われるかを過剰に気にすることから、送球に対して不安を持つようになったと考えられる。バッティングピッチャーはバッターに打たせるという役割があるため、バッターが打ちにくそうにしていたり、凡打を打つてばかりの時にバッティングピッチャーである自分がどう思われているか不安になり、もつと良いボールを投げようと意識する。その結果、身体動作が硬直し、自然な投球フォームが崩れて投球が思うようにできなくなってしまうのである。また、相手バッターが先輩の場合はそのような思いをより強く感じるため、投球フォームを崩しやすい。「恐い先輩に送球することが怖かった」という回答からは、先輩への送球が逸れてしまった場合に怒られる、または自分が嫌われるのではないかという恐怖

心から送球に対して不安を持ってしまおうと考えられる。もしくは、先輩への送球ミスをしてしまい、怒られた経験からその先輩に対して送球することが怖くなり、その先輩へ送球する際に予期不安が生じ、腕が思いきり振れなくなる症状に陥ってしまう。

一方、少数ではあるが「投げ過ぎ」や「骨折してから」という回答も見られた。「投げ過ぎ」と答えた選手は投手であり、投球練習を多く繰り返す中で、一度だけいつもと違う感覚で投げてしまった場合に、いつも通りの投球感覚を失ってしまったと考えられる。「骨折してから」と回答した選手のイップス症状は「腕が縮こまる」という回答であった。したがって、完治した後も骨折した部位を気にかけて送球することで腕が縮こまった投球フォームになってしまい、自然なフォームを崩し、送球が思うようにできなくなってしまうと考えられる。

(4) 克服方法

結果

- 克服方法は下記の通りである。
- ・筋力アップ、思いきり投げる

- ・送球に自信がつくまでスローイングの練習を繰り返した
- ・ネットに向かって送球を繰り返した
- ・インターネットで調べて、良いと思つた投げ方を練習したり、イップスになった人の話を見たりした
- ・送球時に足を使い、思いきつて腕を振るようにした
- ・とにかくキャッチボールを繰り返した
- ・肩を強くした
- ・いろいろな投げ方を教えてもらった
- ・リリースポイントを掴むために塁間を何球も投げた。コーチにベットボールを使つたシャドーピッチングを教えてもらった
- ・キャッチボールでスライダー回転のボールを投げた。中学校の時の投球フォームをビデオで確認し、現在のフォームとの違いを見つけて修正した
- ・落ち着いてプレーすることを心がけた
- ・仲の良いチームメイトとキャッチボールをし、投げ方を見てもらう

- ・自分の投げるボールをイメージする
- ・先輩とキャッチボールをして、思いきり投げる
- ・何度も暴投する
- ・体全体を使つて投げる
- ・投げ方を変える
- ・投手から外野手に転向

考察

キャッチボールによる練習や投球フォームを改善することといった、技術的な面を改善する練習方法が多く見られた。したがって、イップスを克服するには投球フォームを良くする必要があると考える選手が多いことがわかった。実際、イップスになると投球フォームのどこかを崩してしまっている為、投球フォームの改善がイップスに対して効果があると考えてよいだろう。しかし、「自分の投げるボールをイメージする」や「何度も暴投する」のように心理面に効果を与えるような克服方法も見られた。前者の方法では、投げる前に良いイメージを持つて送球することで、送球する前の不安を和らげる効果が期待できる。後者の方法では、故意に暴投を投げることで

暴投への恐れが軽減し、しっかりと腕を振った上での投球が可能になると思われる。また、投手から外野手へのポジションの転向をよぎなくされている選手も存在した。しかし、外野手に転向することで、細かいコントロールから解放され、自然なフォームを取り戻すことも期待できる。

また、イップスを克服できた選手とそうでない選手の克服方法について比較したが、明確な違いはみられなかった。

(5) 新版TEG IIによる検査結果

(a) 群別五つの自我状態の各合計得点の平均値の比較結果

TEG検査の回答結果をもとに、全選手のTEG得点を算出した。イップス経験者と未経験者では、NP尺度とAC尺度の各合計得点に差があるのかを検討するため、アンケート結果を参照し、八〇名をイップス群と非イップス群に分け、群別に五つの自我状態の合計得点の平均値および標準偏差を算出した (Table 1; Figure 1)。その後、群別に五つの自我状態の各合計得点の平均値を

t検定を用いて比較した。その結果、どの自我状態の平均値においても有意な差はみられなかった (CP:t (78) = 1.56 n.s.)、(NP:t (78) = 1.16 n.s.)、(A:t (78) = 0.74 n.s.)、(FC:t (78) = 1.52 n.s.)、(AC:t (78) = 1.47 n.s.)。

考察

本調査の目的は、イップス群のNP尺度とAC尺度が非イップス群のそれらより高い尺度を示すのかを検討することであった。本調査の結果、両群においてNP尺度とAC尺度に有意な差は認められなかった。しかし、Figure 1で示されたように今回の調査対象者八〇名においては、イップス群の方が非イップス群よりNP尺度とAC尺度が高い結果になった。

(b) パターン分類

結果

TEG検査により得られた各選手の得点をマニュアルによって、パターン分類することで、尺度同士の相関が性格特性にどのように影響を及ぼすかを検討します。まず、TEG得点をもとに全選手のエゴグラム・プロフィール

Table 1 群別 5 つの自我状態の各合計得点の平均値

	CP	NP	A	FC	AC
イップス群	13.95 (<i>SD</i> =3.06)	16.29 (<i>SD</i> =2.51)	11.52 (<i>SD</i> =3.74)	13.62 (<i>SD</i> =4.21)	14.14 (<i>SD</i> =4.17)
非イップス群	12.63 (<i>SD</i> =3.44)	15.44 (<i>SD</i> =2.99)	10.80 (<i>SD</i> =3.90)	14.90 (<i>SD</i> =2.93)	12.46 (<i>SD</i> =4.61)

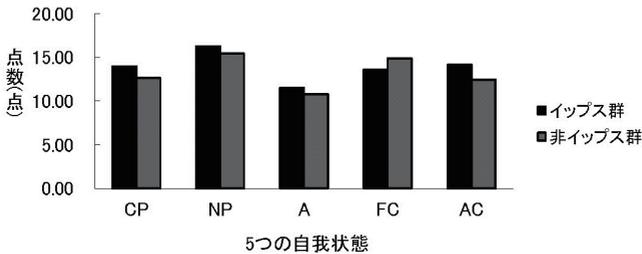


Figure 1 群別5つの自我状態の各合計得点の平均値

を作成した。その後、それぞれの選手のエゴグラム・プロフィールをマニュアルに基づいてパターン分類した。マニュアルによる分類では、エゴグラム・プロフィールをパーセンタイル値を基準に各尺度を五段階にコード化した。コード1は〇〜五%未満、コード2は五〜二五%未満、コード3は二五〜七五%未満、コード4は七五〜九五%未満、コード5は九五〜一〇〇%である。上記五段階のうち、複数の尺度が同じ段階にあるものはほぼ同程度の心的エネルギーを有すると考える。コード化後の尺度で棒グラフを描き、その形からマニュアルのTEGパターン分類より該当するパターンを同定した。一つの尺度だけが他の尺度よりも高い場合は優位型である。どの尺度が最も高いかで、CP優位型、NP優位型、A優位型、FC優位型、AC優位型の五型に区別した。次に、一つの尺度だけが他の尺度よりも低い場合は低位型である。どの尺度が最も低いかで、CP低位型、NP低位型、A低位型、FC低位型、AC低位型の五型に区別した。二つあるいは三つの尺度が同程度に高いあるいは低い場合は、混合型に区別した。パターンの形によって、台形型(I・II・III)、U型(I・II・III)、N型(I・II・III)、

Table 2 群別のパターン分類

イップス群

パターン	人数
NP 優位型	4
AC 優位型	4
CP 優位型	2
A 低位型	2
平坦型 II	2
N 型 I	2
A 優位型	1
逆 N 型 III	1
N 型 III	1
P 優位型	1

非イップス群

パターン	人数
AC 優位型	12
NP 優位型	8
FC 優位型	8
A 低位型	5
平坦型 II	4
M 型	4
N 型 I	3
CP 優位型	3
P 優位型	2
CP 低位型	2
AC 低位型	2
逆 N 型 I	1
U 型 III	1
U 型 II	1
N 型 III	1
C 優位型	1
A 優位型	1

逆 N 型 (I・II・III)、M 型、W 型のいずれかに区別した。五尺度が全て同程度の場合は平坦型であり、その位置する段階によって、高位平坦型、中位平坦型、低位平坦型に区別した。最後に、CP と NP の尺度が同程度に高い場合を P 優位型、FC と AC の尺度が同程度に高い

場合を C 優位型と区別した。また、上記の作業で分類できない場合はもっとも近いパターンの亜型とした(野村, 2006)。以上の作業で本調査参加者のパターン分類を行い、その結果を群別に集計し、降順に並べて比較を行った (Table 2)。

考察

Table 2 より、イップス群、非イップス群の上位に位置するパターンはほぼ類似していた。参考資料として、一般健常者一二二一名、平均年齢 32.3 歳(男性六九二名、年齢の平均と標準偏差は 34.6±14.6 歳、女性五二九名、年齢の平均と標準偏差は 29.2±13.8 歳)に新版 TEG II を用いて調査を行った例がある(吉内, 2006)。その結果、出現頻度の多いパターンとして、AC 優位型 (11.5%)、CP 優位型 (7.5%)、A 優位型 (6.6%)、N 型 I (6.4%)、逆 N 型 I (6.0%)、FC 優位型 (5.3%) の順となった。したがって、本調査の結果においても吉内の調査結果と類似したものが得られたと考えられる。唯一、吉内の調査結果と本調査の結果で異なる点は NP 優位型が両群ともに上位パターンに存在していることである。これは本調査の対象が野球部員であることが影響

していると考えられる。彼らは団体スポーツの中で、チームワークや協調性の大切さを学んでいるため、思いやりや優しさの自我状態を意味するNPの尺度が高くなっているといえる。そのため、一般健常者を対象とした吉内の調査結果と異なつたと考えられる。

本調査のパターン分類で両群を比較した結果、異なる点がみられた。それは、非イップス群においてのみ、FC優位型とM型が上位パターンに存在していることである。

FC優位型は「自由で陽気にはしゃぐ好奇心旺盛な明るい人」である(野村, 2006b)。FCの尺度が高い場合は、感情や欲求を自由に表現することができ、自分も楽しむことができる。ただ同時に、親切で寛容的な行動や態度を示すNPや周囲に適應するACの尺度が低い場合は融通がきかず、非協調的な性格傾向がみられる(佐々木, 2006)。しかし、このパターンの性格特性は、ミスをして物事を楽しむことができるので、気持ちの切り替えが容易であると考えられる。したがって、ミスをした動作に対して、気持ちの切り替えが早いいため、予期不安を抱きにくい。そのため、イップス症状を引き起こしにく

いと考えられる。

M型はNPとFCの尺度が同程度に強く、CP、A、ACの尺度が相対的に低いものである。このパターンの性格特性は「人に優しく世話やきで面倒見がよいと同時に、陽気にはしゃいで自分も楽しむことができる」という特徴がある(野村, 2006b)。NPが高い場合の特徴は、「他者を受容し、強要せず、思いやりがある」という面を持つ。ただ、責任感を発揮するCPや物事を客観的かつ論理的に判断するAが低すぎると社会のルールや規則を無視して気分の向くままに突っ走ることがある(野村, 2006b)。このパターンはFCが高いため、FC優位型と同じで自分も楽しむことができる。そのため、ミスをして気持ちの切り替えが容易である。したがって、イップスを引き起こしにくくと考えられる。

以上の結果から、イップスを引き起こしにくい性格特性としてFCの尺度が高いことが関係していると考えられる。Table 2のイップス群には、FC優位型が存在していないことからFCがイップスに関係している可能性は高い。また、Figure 1においても非イップス群のFC尺度はイップス群のそれより高い尺度を示してい

た。

(C) クラスタ分析

結果

パターン分類で尺度同士の相関を検討したが、パターン分類ではマニュアルに基づいたパターン分けであるため、各尺度をより詳細に検討する必要であった。そこで、パターン分類でコード化した数値にクラスタ分析を行い、調査対象者を一九種類のクラスタに分類した (Figure 2)。さらに、一九種類に分類したクラスタをイップス群と非イップス群に分けた (Table 3)。そして、イップス経験者が多数存在したクラスタと非イップス経験者が多数存在したクラスタを Figure 2 とコード化した数値を参照し、性格特性を検討した。イップス経験者が多数存在したクラスタは、1、4、6、14であった。一方で、非イップス経験者が多数存在したクラスタは、2、15、17であった。

考察

先行研究で示されていたイップスになりやすい性格は、「責任感が強い、他人の目をよく気にする」と「NPとACの尺度が高い」であった。クラスタ分析の結果

Table 3 群別の各クラスタ人数

	イップス(人数)	非イップス(人数)
クラスタ1	6	4
クラスタ2	0	6
クラスタ3	0	3
クラスタ4	3	1
クラスタ5	0	2
クラスタ6	2	4
クラスタ7	0	3
クラスタ8	0	3
クラスタ9	1	2
クラスタ10	1	4
クラスタ11	2	5
クラスタ12	1	1
クラスタ13	1	4
クラスタ14	3	0
クラスタ15	0	4
クラスタ16	1	3
クラスタ17	0	7
クラスタ18	0	1
クラスタ19	0	2

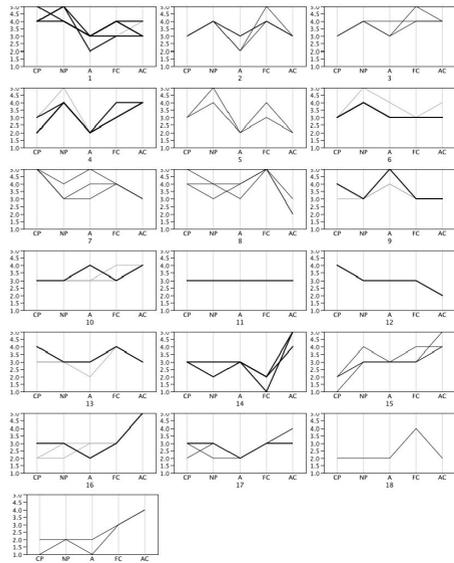


Figure 2 全クラスタの分布図

果から、イップス経験者が多数存在したクラスターには、先行研究で示されたイップスになりやすい性格特性とは異なるものもみられた。イップス経験者が多数存在したクラスターでは、先行研究と同様にNPとACの両尺度が高い選手もいたが、NPかACのどちらか一方のみが高い選手も存在した。そして、NPやACの高さに加えて、CPが高い、もしくはFCが低いといった特徴がみられた。一方で、非イップス経験者が多数存在したクラスターでは、NPもしくはACが高いうえに、イップス経験者が多数存在したクラスターとは反対にCPが低い、もしくはFCが高い場合がみられた。NPやACの尺度が高いと同時にCPやFCの尺度が、イップスにかかりやすい性格に関連していることが分かった。

ここからは、イップス経験者が多数存在したクラスターと非イップス経験者が多数存在したクラスターの性格特性を述べたい。

まずは、イップス経験者が多数存在したクラスターの特徴である。こちらは、クラスター1、4、6、14が該当する。

クラスター1の特徴は、全員のCPとNPの尺度が

コード4、5を示していることである。他の自我状態の尺度は平均的であった。CPの尺度が高い場合の性格特性は、「目標が高く、理想を追求し、自他ともに厳しく、責任感が強い」である(佐々木, 2006)。NPの尺度が高い場合の性格特性は、「思いやりがある、人に温かく接し親しみやすい、他人の世話をよくやく」である(佐々木, 2006)。この場合の性格特性は、責任感の強さや思いやりがあることから、自分のミスに対して人一倍に責任を感じ、周囲に対して申し訳ないと強く思ってしまう。その結果、次に同じ動作をする時には「またミスをしてしまうのではないか」という予期不安が起き、そこから身体動作に影響を及ぼしてしまう。そして、身体動作が硬くなり、普段できる動作ができなくなると考えられる。このクラスターのイップス経験者が症状を引き起こしたきっかけには、「ちゃんと投げないと、思い過ぎて精神的になった」、「先輩達の足を引っ張ってはだめという気持ちから」、「しつかり投げないといけないという心の焦り」といった責任感の強さがうかがえる回答がみられた。したがって、過度の責任感の強さや思いやりはイップスを引き起こしやすい性格特性であるといえる。

クラスター4の特徴は、NPとACの尺度が高いことである。こちらのクラスターは先行研究で示された結果と同様である。NPはコード4、5の選手がみられ、ACは全員がコード4を示した。CPとFCの尺度は平均

的で、Aの尺度は全員がコード2であった。ACの尺度が高い場合の性格特性は、「従順で他人に依存し、他人の意見に流されやすい。他人の評価を気にする。劣等感を持ちやすい」というマイナス面がある。プラス面では、「協調性、忍耐強さ、他人に対する寛大さ」がある（野村, 2006）。NPとACの尺度が高い場合の性格特性は、思いやりがあるので自分のミスで周囲に迷惑をかけてしまうことに対し、強く申し訳ないと感じてしまう。また、他人の評価を気にしてしまい、自分の価値を低く思ってしまう傾向がある。これらの特徴から、ミスをしてしまうとマイナス思考に陥り、ミスに対する予期不安が起こってしまう。その予期不安が動作に影響を及ぼし、イッスを引き起こすと考えられる。Aの尺度が低い場合は、「事実に基づいて合理的に判断することが困難で混乱しやすい、感情に基づいた判断をするので、現実認識が歪むことがある」という性質がある（佐々木, 2006）。し

かし、本調査対象者は高校生であることを考慮すれば、合理的な現実検討能力は十分に備わっていないと考えられる。そのため、Aの尺度は性格特性の判断基準から外すこととした。

クラスター6の特徴は、NPが他の自我状態の尺度よりも高いことである。他の自我状態の尺度は平均的である。したがって、このクラスターの性格特性は面倒見がよくて思いやりがあるという性格である。他の自我状態の尺度が平均的であるため、責任感もあるので、優しくて頼りになる存在である。また、適当に楽しみ、周囲に迎合する力も持ち合わせている（和田, 1995）。以上のような性格特性であるため、このクラスターにおいては、特にイッスになりやすい性格特性とはいえない。

クラスター14の特徴は、FCが低く、ACが高い尺度を示していることである。他の自我状態の尺度は平均的であった。FCが低い場合の性格特性は、「感情を抑制し、素直に表現できないため、物事を楽しめない。消極的で、気分が暗く、沈みがち」である（佐々木, 2006）。FCの尺度が低く、ACの尺度が高い場合の特徴は、自分のミスから自分の評価を下げ、他人の評価を気にしてマイ

ナス思考に陥る。さらに、物事を楽しむことができないため、自分のミスをやむ気持を切り替えることが困難である。したがって、ミスをやむまでも引きずってしまうため、再び同じ動作を行う際にミスに対する予期不安を起こしてしまう。予期不安によって身体動作が硬直し、本来の自然な動きを崩してしまい、イップスにかかると考えられる。

次に、非イップス経験者が多数存在したクラスターの特徴である。こちらは、クラスター2、15、17が該当する。

クラスター2の特徴は、NPとFCの尺度が高いことである。他の自我状態は平均的であった。FCが高い場合の性格特性のプラス面は、「直観的で行動的である。のびのびと振る舞い、自分の感情を素直に表現できる。好奇心、積極性、創造性に富む。」である。マイナス面は、「自分勝手に行動の制御ができず、他人への配慮に欠ける。」である(佐々木, 2006)。以上から、このクラスターの性格特性は、人に優しく世話やきで面倒見がよく、陽気にはしゃいで自分も楽しむことができる。したがって、ミスをしてそれを悔やむ気持ちを切り替えて、前向き

に考えることができる。そのため、イップスに陥りにくいと考えられる。また、CP、A、ACの尺度が平均的であるので、共感性があり、自己主張もでき、責任感があり、現実検討ができる。

クラスター15の特徴は、CPの尺度が低くACが高い尺度を示していることである。CPが低い場合の性格特性は、「自他ともに高い要求をしない、責任感や倫理感に乏しい」といった性質がある(佐々木, 2006)。CPが低く、ACが高いこのクラスターの特徴は、周囲に依存し自分の判断で行動することが難しく、責任感や倫理感が欠ける性格である。したがって、それほど責任を感じないため、ミスをして引きずることがない。そのため、ミスをした動作に対して予期不安が起きにくいのでイップスになりにくい性格であると考えられる。

クラスター17の特徴は、Aの尺度が低く、他の尺度はほぼ平均的であった。クラスター4の特徴でも述べたようにAの尺度では性格特性を判断しないこととする。このクラスターは全体的に尺度が平均的な値を示していた。しかし、全ての自我状態の尺度がコード3であるクラスター11においては、七名のうち二名がイップス経験

者であった。したがって、周りの環境や何かの出来事によつてプレッシャーがかかり、イップス症状を引き起こす可能性はあるといえる。以上のことから、クラスター17がイップスになりにくい性格特性であるとはいえない。

イップス経験者が多いクラスターと未経験者が多いクラスターを比較した結果、イップスにかかりやすい性格にはNPとACCの尺度が深い関わりを持ち、これらに関連してCPやFCの尺度の高低によつてイップスにかかりやすい性格とかがりにくい性格に分かれることが理解できた。イップス経験者が多いクラスターには必ずNPもしくはACCの尺度が高い、もしくはその両方が高かった。これにCPの尺度の高さ、あるいはFCの尺度の低さが関連し、イップスにかかりやすい性格特性を作り出すと考えられる。

一方で、イップスになりにくいクラスターにおいても、NPやACCの尺度が高いクラスターも存在したが、それらにCPの尺度の低さやFCの尺度の高さが関連し、イップスにかかりにくい性格特性を作り出すと考えられる。

つまり、イップスにはNPやACCの尺度が高いことに関連して、CPやFCの尺度が深く関係していることが分かった。

4. まとめ

本調査の結果、アンケートでは、野球におけるイップスがどういった症状であるかを掴むことができた。野球におけるイップスは送球に問題が起こる可能性が高く、症状を引き起こすきっかけは過去の送球ミスによる苦い経験や上下関係等の周囲の環境がプレッシャーとなり、症状を引き起こすことが分かった。また、克服方法においては技術面の練習を行った選手が多く、イップスを克服している選手が多かったことに驚かされた。

新版TEGIIでの本調査結果において、先行研究の結果は支持されなかった。しかし、本調査対象者のイップス経験者においては先行研究の結果に少なからず近い結果が得られた。Figure 1では、イップス群のNPとACCの尺度が非イップス群より高かった。クラスター分析の結果、イップス経験者が多数存在したクラスターでは、

NPとACCのどちらか一方の尺度が高い、または両方が高く、それらに関連して、CPの尺度が高いことやFCの尺度が低いことにより、イップスにかかりやすい性格特性を作り出すことが理解できた。一方で、非イップス経験者が多数存在したクラスターでは、NPやACCの尺度が高い場合もみられたが、イップス経験者とは反対にCPが低く、FCが高いという特徴がみられた。イップ

スと性格の関連においては、NPやACCの尺度に加え、CPやFCの尺度が重要であることを理解できた。個人的に納得させられたのは、FCの尺度がイップスに関連していたことである。私自身もイップス経験者であるので、自分の性格と重ね合わせて考えてみると、物事を楽しむことがあまりできていなかったことに気づいた。私

が回答したTEG得点でも、やはりFCの尺度は低かった。今後の指導法としては、選手自身が自分の性格について客観的に見つけることが大切であると思う。アンケートの克服方法ではキャッチボールやネットに向かつての送球練習、投球フォームを改善する練習が多かった。高校生の段階で自分の性格を客観視することはあまりない

と思うが、自分の性格を客観的に知ることは選手としても、また今後の人生においてもプラスになる。私自身も新版TEG IIに出会い、自分の性格を客観視できたことで、精神面の改善に大きく役立った。その結果、イップス症状は落ち着き、日常においても精神面での成長を感じている。是非、自分の性格について客観的に見つける機会を持つて欲しい。

また、本調査を通じてイップスになりやすい性格傾向を掴むことはできたが、そのような性格をはつきりと断定することは不可能であると感じた。人間の性格とは、多種多様で複雑なものあり、簡単に解釈できるようなものではないからである。

（謝辞）本調査実施にあたり、お忙しい中多大なるご協力を頂いた選手の皆様ならびに監督様に深く感謝申し上げます。

5. 引用文献

イップス研究所「イップスとは？」 <http://tips.jp/>

class/detail/id=12

イップス研究所 b イップスになりやすいスポーツと症

状例 <http://yips.jp/class/detail/id=13>

野村忍 2006a 交流分析とは何か 新版TEGII解説

とエゴグラム・パターン 金子書房 3-13頁

野村忍 2006b TEGIIパターンの特徴 新版TEG

II解説とエゴグラム・パターン 金子書房 53-77

頁

佐々木直 2006 エゴグラムの解釈 東京大学医学部

心療内科TEG研究会(編) 新版TEGII解説と

エゴグラム・パターン 金子書房 19-23頁

田辺規充 2001 イップスの科学 星和書店

棚橋孝太 2007 送球時に起こるイップスと性格特性

の関係の研究 早稲田大学スポーツ科学部卒業論文

要旨集 (2007年度) <http://www.waseda.jp/sports/supokaka/research/sotsuron2007/IK04B139.pdf>

殖栗正登 2010 イップスの治し方、診かた [http://](http://www.hb-nippon.com/column/408-ueguri/4155-clmn2009-01-date20100208no07ub)

www.hb-nippon.com/column/408-ueguri/4155-clmn2009-01-date20100208no07ub

和野田迪子 1995 TEGパターン解説 東京大学心療

内科(編著) 新版エゴグラム・パターン——TE

G(東大式エゴグラム) 第2版による性格分析——

金子書房 58-130頁

吉内一浩 2006 新版TEGIIパターン分布の例 新

版TEGII解説とエゴグラム・パターン 金子書

房 79-82頁

(人間科学部二〇一三年度卒業生・村山満明ゼミ)

野球の打撃動作の解析

―床反力から見た経験者と未経験者の差異―

下田 圭亮

新西 一誠

一. まえがき

野球の打撃動作は全身の各関節が連動しながら遂行される高度にプログラミングされた動作である[1]。打者は筋収縮によって引き起こされる体幹の回転運動を上肢に伝達する運動エネルギーと、地面反力を利用して得られる運動量をバットに伝えることで強い打球を打つことができる。また、高木ら[2]はバットに大きな運動エネルギーを伝えるには上半身の回転速度を速くする必要があり、上半身の回転を生み出す下肢の働きが重要であると述べている。

金堀ら[3]は、被験者を指導者の主観的評価によって

最も打撃の優れている群(FC群)とそれに準じて打撃が優れている群(SG群)に分け、三次元動作解析装置を用いて検討した。その結果、身体重心の移動距離において、FC群はStep局面で最も大きく変位したが、SG群はApproach局面で最も大きく変位することを報告している。その他の打撃動作に関する先行研究には、床反力(地面反力)を比較、検討したものの[4, 7]、身体の重心移動や回転運動に着目したものの[8-10]などがあるが、打撃動作の各局面について、経験者と未経験者を比較検討した報告は少ない。

現在、オリンピック種目から野球がなくなり、それに反比例するかの様に野球に興味を示す子どもが減ってい

る様に思われる。子ども達が学校体育や部活動などの限られた時間の中で野球の楽しさ、達成感などを効率よく経験することが、野球競技者の増加につながると考える。子どもを野球好きにする具体的な方法のひとつは、ヒットやホームランをたくさん打てる攻撃の要として活躍できることであろう。そのために、打撃動作の局面における適切な指導を行うことが指導者に求められる。

そこで本研究では、野球経験者と未経験者の打撃動作における床反力の差異を明らかにすることを目的とした。本研究により、未経験者を指導する際に、効果的なトレーニング方法ならびに打撃動作を改善する方法を考案するための基礎的資料を得ることができると考える。

二. 方法

二. 一 被験者

健常な男子大学生で野球経験者五名（経験群）と野球未経験者五名（未経験群）を被験者とした。いずれの被験者も右打ちであった。経験群は五年以上にわたり学校の部活動として野球競技者であった者とした。実験に先立って被験者には研究の趣旨を十分に説明し、参加する

表 1. 経験群と未経験群の身体的特徴

(a) 経験群、(b) 未経験群

Sub.	a			b		
	年齢 (歳)	身長 (cm)	体重 (kg)	年齢 (歳)	身長 (cm)	体重 (kg)
1	21	175	73	20	175	78.6
2	21	173	74.8	21	166	48.4
3	20	169	84.2	19	166	52.3
4	21	173	59.8	19	163	49
5	19	176	65	19	170	60.6
平均±SD	20.4±0.80	173.2±2.40	71.4±8.41	19.6±0.80	168.0±4.14	57.8±11.28

ことに同意を得た。被験者の身体的特徴を表 1 に示した。

二. 二 測定方法

被験者には打撃動作を三回行わせた。具体的には、写真 1 に示すように Force Plate (Kistler 社製) を二枚縦に並べ、被験者には、一枚目の Force Plate に軸足を置き、二枚目に踏み込み足（以後、踏込足）を置くように指示し、床反力の測定を行った。この状態で、被験者には、バッテイングテーパー（以後、BTと略す）に固定した軟式ボール B 球をネットに向かって打つ動作を行わせた。

二・三 分析方法

床反力データを表計算ソフト Excel に取り込み、図 1 に示す垂直分力 (Z)、側方分力 (X)、並びに水平分力 (Y) について解析した。床反力は被験者の体重の影響を除くためにそれぞれの被験者の体重を用いて正規化 (0%) した。打撃動作を軸足と踏込足に分け、それぞれ①踏込足接地 (Step In、以後 SI)、②インパクト (Impact、以後 IP)、③フォロースルー (Follow Through、以後 FT) の三つの局面に分けた。三方向の床反力 (X、Y、Z) の最大値を各被験者について、三回の打撃動作の平均値



写真 1. 実際風景

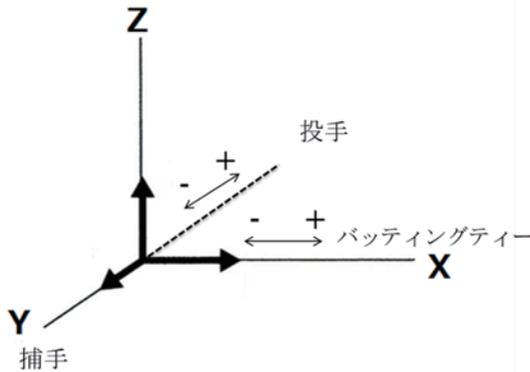


図 1. 床反力の 3 分力の方向を示す模式図
(X: 側方分力、Y: 水平分力、Z: 垂直分力)

を算出し、その被験者の値とした。この値を用いて各群の五名の被験者の平均値を算出し、経験群と未経験群で比較した。

二、四 統計処理

二群間の差異を見るために、F検定により等分散を検討した後、t検定を用いて評価した。有意水準は $P < 0.05$ とした。

三、結果

三、一 踏込足の床反力について

(一) SI 200cm

図2 (以下の図は文末にまとめて掲載)の(A)はSIの踏込足の垂直分力(%)について経験群と未経験群の平均値を比較したものである。垂直分力(%)では未経験群の方が大きい傾向が見られたが、有意な差は認められなかった。(B)を見る。水平分力(%)では未経験群の方が大きい傾向が見られ、さらに、そのバラツキ(標準偏差)も大きい傾向を示した。一方、両者をt検定により比較検討したところ、有意な差は認められなかった。(C)を見る。側方分力(%)では、経験群、未経験群の値はそれぞれ $0.98 \pm 1.86\%$ 、 $-5.57 \pm 5.62\%$ を示し、経験群は体重の 0.98% であるのに対して、未経験群は -5.57% とマイナスの値を示した。両者をt検定に

より比較検討したところ、両者には有意な差は認められなかった。しかし、経験群に比して未経験群の方がバラツキは大きい傾向を示した。このことは、有意差は認められないが、未経験群では踏み込んだ時にBTの方向とは逆方向に分力が生じ、BT方向に重心を乗せる傾向があるのに対して、経験群ではほぼ中立のポジションに重心が置かれていることを示している。

(二) IP 200cm

図3の(A)は、IPの踏込足の垂直分力(%)について経験群と未経験群の平均値を比較したものであり、未経験群の方が有意($P = 0.021$)に大きかった。このことは、経験群ではIPの瞬間にも踏込足に全重心を踏込足に移していないことを示している。(B)を見る。水平分力(%)では経験群、未経験群の値はそれぞれ $24.34 \pm 8.89\%$ 、 $-28.31 \pm 9.98\%$ と両者共にマイナス(捕手方向)の分力を示した。これは投手方向に重心が移動したことを意味しており、その力の絶対値は経験群の方が小さい傾向が見られたが、有意差は認められなかった。(C)を見る。側方分力(%)では、経験群の方

が大きい傾向が見られた(有意差なし)。これは、経験群ではIP時にBP方向の力が踏込足にかかっていることを示し、BPから離れる方向に重心が移動していることを意味している。

(3) FTについて

図4の(A)はFEの踏込足の垂直分力(%)について経験群と未経験群の平均値を比較したものであり、未経験群の方が大きい傾向を示した(有意差なし)。このことは、未経験群の方が経験群よりも多く重心を踏込足にかけていることを示している。またそのバラツキも大きい。(B)を見る。水平分力(%)では経験群、未経験群の値はそれぞれ $-10.41 + 1.62\%$ 、 $-9.97 + 4.32\%$ と両者共にマイナス方向(捕手方向)の値を示した(有意差なし)。(C)を見る。側方分力(%)では、経験群と未経験群の値はそれぞれ $4.34 + 1.31\%$ 、 $4.40 + 2.35\%$ とほぼ同等の値を示し、両者に有意な差は認められなかった

三. 二 軸足の床反力について

(1) SIについて

図5の(A)はSIの軸足の垂直分力(%)について比較したものであり、経験群の方が大きい傾向が見られた(有意差なし)。この結果は踏み込んだ時に、経験群の方が未経験群よりも、重心を軸足に残す割合が多いことを意味している。(B)を見る。水平分力(%)では経験群の方が大きい傾向が見られた(有意差なし)。(C)を見る。側方分力(%)は、両者を比較したところ、有意な差は認められなかった。

(2) IPについて

図6の(A)はIPの軸足の垂直分力(%)について経験群と未経験群の平均値を比較したものである。経験群の方が大きい傾向が見られたが、有意な差は認められなかった(また、両者の標準偏差が大きいため、結果の解釈には注意を要する)。この結果は、有意差は認められないもののIPの瞬間にも経験群の方が軸足に重心が残っている割合が多いことを示している。(B)を見る。水平分力(%)では未経験群の方が大きい傾向を示したが、有意な差は認められなかった。(C)を見る。側方

分力(%)では、経験群、未経験群の値はそれぞれ $2.04 + 1.48\%$ 、 $2.45 + 1.99\%$ を示した。両者を比較したところ、有意な差は認められなかった。

(c) FTについて

図7の(A)はFTの軸足の垂直分力(%)について経験群と未経験群の平均値を比較したものであり、経験群の方が大きい傾向が見られた(有意差なし)。このことは、FTの局面においても、経験群の方が軸足により多くの割合で重心を残していることを示し、未経験群と経験群では明らかにその動作が異なることを意味している。(B)を見る。水平分力(%)では経験群の方が大きい傾向が見られた(有意差なし)。この結果は、未経験群の標準偏差が大きく、両者に有意な差は見られないものの、経験群の方が投手方向とは逆の方向への圧のかけ方が大きいことを示している。(C)を見る。側方分力(%)では、経験群の方が大きい傾向を示した(有意差なし)。

三三 経験群と未経験群の床反力のバラツキ(標準偏差)の比較

次に三つの局面の踏込足と軸足において、各被験者から得られた各分力(%)の標準偏差を求め、経験群と未経験群それぞれについて、その平均値を算出し、比較を試みた。

(1) 踏込足について

図8の(A)はSIの踏込足の垂直分力(%)の標準偏差を経験群($1.01 + 1.18\%$)と未経験群($1.12 + 1.08\%$)で比較したものである(有意差なし)。(B)を見る。水平分力(%)では経験群、未経験群の値はほぼ同等の値を示した。(C)を見る。側方分力(%)でも、経験群、未経験群の値はほぼ同等の値を示した(B、Cとも有意差なし)。

図9の(A)はPIの踏込足の垂直分力(%)の標準偏差を経験群と未経験群で比較したものである。その結果、未経験群のバラツキの方が大きい傾向を示した(有意差なし)。(B)を見る。水平分力(%)では経験群、未経験群はほぼ同等の値を示した。(C)を見る。側方分力(%)では、未経験群のバラツキの方が大きい傾向を示した。B、Cとも有意な差は認められなかった。

図10の(A)は「」の踏込足の垂直分力(%)の標準偏差を経験群と未経験群で比較したものであり、未経験群の方が大きい傾向を示した(有意差なし)。(B)を見る。水平分力(%)では、未経験群のバラツキの方が大きい傾向が見られた(有意差なし)。(C)を見る。側方分力(%)では、経験群、未経験群は、ほぼ同等の値を示した(有意差なし)。

(2) 軸足について

図11の(A)は「」の軸足の垂直分力(%)の標準偏差を経験群と未経験群で比較したものである。その結果、経験群のバラツキの方が大きい傾向を示した(有意差なし)。(B)を見る。水平分力(%)では、経験群のバラツキの方が大きい傾向が見られた(有意差なし)。(C)を見る。側方分力(%)では、未経験群のバラツキの方が大きい傾向を示した(有意差なし)

図12の(A)は「」の軸足の垂直分力(%)の標準偏差を経験群と未経験群で比較したものである。その結果、未経験群のバラツキの方が大きい傾向を示した(有意差なし)。(B)を見る。水平分力(%)では経験群、未

験群はほぼ同等の値を示した。(C)を見る。側方分力(%)でも、経験群、未経験群はほぼ同等の値を示した(B、Cとも有意差なし)。

図13の(A)は「」の軸足の垂直分力(%)の標準偏差を経験群と未経験群で比較したものである。その結果、未経験群のバラツキの方が大きい傾向を示した(有意差なし)。(B)を見る。水平分力(%)では両群においてほぼ同等の値を示した。(C)を見る。側方分力(%)でも、両群においてほぼ同等の値を示した(B、Cとも有意差なし)。

三、四 三局面の床反力の変化について

経験群と未経験群のSI、IP、FTの三局面の床反力(%)
(「」)の平均値について、その継時的変化を比較した。

(1) 踏込足について

図14の(A)は、踏込足の垂直分力(%)の変化を比較したものである。経験群(a)と未経験群(b)のSIの平均値はそれぞれ4.6%、5.7%、IPは93.2%、123.9%、FTは55.8%、71.5%であった。経験群と未

経験群のSIの差はわずかだが、IPでは30.7ポイントの差がある。FTではその差は多少減少するが、15.8ポイントの差が認められる。すなわち、両者の増減の傾向は似通っているが、全ての局面において未経験群の方が大きい傾向を示した。特に、図3(A)に示したようにIPでは有意($P=0.021$)に経験群の方が低い。(B)を見る。水平分力(%)では、経験群と未経験群のSIの平均値はそれぞれ1.3%、5.4%、IPは-24.3%、-28.3%、FTは-10.4%、-10.0%であった。経験群に対する未経験群の差はSIでは+4ポイント、IPでは-4ポイント、FTでは+0.4ポイントとなり、両者の増減傾向は同等である。(C)を見る。側方分力(%)では、SIの平均値はそれぞれ1.0%、-5.6%、IPは8.6%、0.9%、FTは4.3%、4.4%であった。SIでの両者の差は6.6ポイントであった。IPではその差は7.7ポイントと大きくなり、FTではほぼ同等であった。この様に、SIとIPにおいて、垂直分力(%)と側方分力(%)で両者の増減傾向に特徴的な差異が見られた。

(2) 軸足について

図15の(A)は、軸足の垂直分力(%)の変化を比較したものである。経験群(a)と未経験群(b)の平均値はそれぞれSIでは84.3%、79.4%、IPは11.7%、7.7%、FTは38.9%、25.7%であった。経験群と未経験群のSIの差は4.9ポイント、IPでは4.0ポイント、FTでは13.2ポイントであり、その増減の傾向は似かよっていたが、いずれの局面においても経験群の方が大きな値を示した。(B)を見る。水平分力(%)では、経験群と未経験群のSIの平均値はそれぞれ17.9%、16.2%、IPは-2.7%、-1.8%、FTは4.9%、2.2%であり、FTにおいて両者の差は2.7ポイントとやや大きくなるものの両者はほぼ同様の増減の傾向を示した。(C)を見る。側方分力(%)では、SIではそれぞれ7.3%、8.2%、IPは2.0%、2.5%、FTでは2.9%、3.7%であり、両者はほぼ同等の増減傾向を示した。この様に、両者は三局面の三分力(%)で、ほぼ同等の増減傾向を示したが、特に垂直分力(%)では、すべての局面で経験群の方が大きくなる傾向を示した。

四. 考察

本研究では、野球における打撃動作の床反力を経験群（五名）と未経験群（五名）について測定し、両者の各分力を比較・検討することによって、未経験者を指導する際の基礎的資料を得ようと考えた。

以下、得られた結果に基づいて検討を加える。

四、一 床反力から見た経験群と未経験群の差異について

踏込足について、経験群と未経験群の垂直分力(%)を比較した場合、全ての局面で、未経験群の方が大きくなる傾向を示し、特にP時では未経験群の方が有意($P=0.021$)に大きくなることを示した(図3(A))。水平分力(%)では、P時に経験群は $-24.34 + 8.893\%$ であるのに対して、未経験群は $-28.31 + 9.981\%$ を示した(図3(B))。側方分力(%)では、SI時に未経験群はマインス方向の分力($-5.6 + 5.67\%$)を生じたのに対して、経験群ではいく小やプラスの分力($0.98 + 1.867\%$)しか生じなかった。P時では、経験群の $8.6 + 2.02\%$ に対して、未経験群は $0.90 + 4.396\%$ を示し、経験群の方が大きくなる傾向が見られた。軸足の垂直分力(%)

を各局面で比較すると、いずれの局面においても経験群の方が大きくなる傾向が見られた。水平分力(%)並びに側方分力(%)においてもS時で経験群の方が大きくなる傾向が認められた。

以上、踏込足と軸足の垂直分力(%)と水平分力(%)の結果は、未経験群では、経験群と異なり、重心を大きく踏込足に移動させ、特にP時には体重以上の力を踏込足に加えていることがわかる。さらに側方分力(%)のP時の結果は、未経験群では経験群に比してBTと逆方向に力を出していることを示しており、BT方向に重心を移動させていることを意味している。図14(C)に示す側方分力(%)の経時的变化を見た場合、その差はより鮮明に認められる。上述の結果と考え合わせると、未経験群の場合、一般的に言われている「前に突っ込んでいる」状態で、体軸が定まらずに打撃動作を行っているものと考えられる。

高橋ら[11]は、打撃動作並びに再現動作を撮影し、熟練者と未熟練者の再現のずれを比較した。その結果、未熟練者は両者のずれが大きく、再現動作ではバットの軌道のみを意識がいき、下半身を意識しておらず、上肢

のみによつてスイングしていると述べている。本実験の未経験群においてもボールに当てることだけに意識が集めたため、前に突つ込んだ打撃動作を行つた可能性が示唆される。その原因は、高橋らの言う様に上肢のみによるスイング動作、身体とボールの距離感、バットの長さの感覚が正確に認知されていない可能性をその要因として挙げる事ができる。矢内¹⁸⁾は打撃動作を床反力データから解析し、①踏込足がスライドした後を受ける床反力の水平方向成分は、 α から遠ざかる方向(側方分力が+の値)から捕手方向(水平分力が-の値)へ変化する。②同じ期間に軸足が受ける床反力は投手に向かう方向から β 方向へと変化している。③これら二つの力が偶力のように作用することにより、システムが重心を通る鉛直軸まわりに回転運動を起こすと述べている。すなわち、これらの感覚の欠如は打撃動作においては、その感覚の修正にのみ終始するために、速いバットの回転運動を引き起こす方向に運動が行われておらず、そのためにボールに大きな運動量を伝えることができないものと推察される。

五、要約

本研究により、未経験群はP₁時に経験群に比して踏込足に重心が多く乗っていることが示唆された。これは一般的に言われる「前に突つ込んでいる」状態を示している。さらに、側方分力(%)の結果は体軸がしっかりと定まっていないことを表しているものと推察された。これらのことから指導の際には、体軸を定めるために軸足に体重を残し、前に突つ込まないよう意識させ、ボールとの距離感覚を掴ませるように指導を行う必要がある。

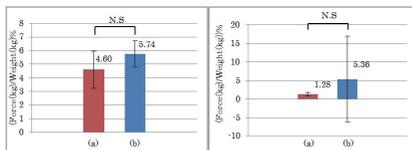
謝辞

卒業論文作成にあたり懇切丁寧なる御指導を頂いた大阪経済大学人間科学部楠本秀忠教授に深甚の謝意を表します。また、実験の準備、実施、被験者、データ整理に関して協力頂いた大阪経済大学の学生諸氏に心よりお礼を申し上げます。最後に、大阪経済大学人間科学部中尾美喜夫教授、大阪経済大学人間科学部谷所慶准教授、大阪経済大学情報社会学部野村国彦准教授には論文作成にあたり有益な助言を頂きました。ここに謹んで感謝の意

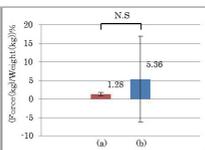
を表します。

引用文献

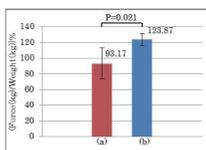
- [1] 小林裕和、安倍浩之、福山支伸、ほか。(2004): 「打撃動作における軸足股関節角度が bat head speed に与えるに影響」、理学療法学、31、4-20
- [2] 高木斗希夫、湯浅景元(2002): 「野球のバッティングにおける骨盤と下肢の運動」、中京大学体育学論叢、44、47-51
- [3] 金堀哲也、山田幸雄、曾田宏、ほか。(2014): 「野球の打撃における指導者の主観的評価に対するキネマティクスの研究: 下肢および体幹部に着目して」、体育学研究、59、133-147
- [4] 小田伸午、森谷敏夫、田口貞善、ほか。(1991): 「地面反力からみた野球のティーバッティング技術」、体育学研究、36、255-262
- [5] 小野芳夫、田巻弘之、下大迫晃、ほか。(1992): 「野球のティーバッティングにおける踏込足の床反力」、体力科学 41、891
- [6] 小田伸午、森谷敏夫、田口貞善(1991): 「野球のティーバッティングにおける地面反力・レギュラー選手と非レギュラー選手の比較」、Jpn J Sports Sci、10、80-88
- [7] 勝又宏、川合武司(1996): 「地面反力からみた異なる打球速度に対する野球の打撃動作の特性」、体育学研究、40、381-398
- [8] 矢内利政(2007): 「野球のバッティングにおける重心移動と回転運動 - Deterministic model を利用した分析 (特集 打動作)」、バイオメカニクス研究、11、200-212
- [9] 高木斗希夫、湯浅景元(2003): 「野球のバッティングにおける構えからステップ動作終了時までの重心移動」、中京大学体育学論叢、45、71-75
- [10] 平野裕一、町永智丈(1990): 「野球の打撃中の身体重心移動様式」、バイオメカニクス研究、日本バイオメカニクス学会編、226-228
- [11] 高橋野人、山西哲郎(2007): 「野球の打撃動作における再現性に関する実験的研究」、日本体育学会大会予稿集、58、p.224
- (二〇一四年度人間科学部卒業予定・楠本秀忠ゼミ)



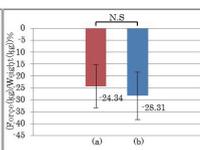
(A)垂直分力(%)



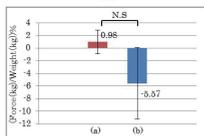
(B)水平分力(%)



(A)垂直分力(%)



(B)水平分力(%)



(C)側方分力(%)

図 2.S1 の踏込足の床反力(平均値)の比較

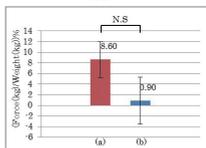
(a)経験群、(b)未経験群

(A)垂直分力(%)

(B)水平分力(%)

(C)側方分力(%)

(n=6)



(C)側方分力(%)

図 2.SP の踏込足の床反力(平均値)の比較

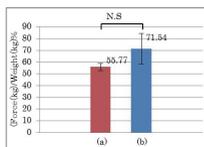
(a)経験群、(b)未経験群

(A)垂直分力(%)

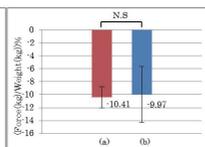
(B)水平分力(%)

(C)側方分力(%)

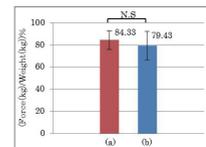
(n=6)



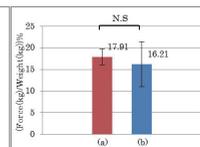
(A)垂直分力(%)



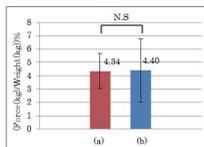
(B)水平分力(%)



(A)垂直分力(%)



(B)水平分力(%)



(C)側方分力(%)

図 4.PT の踏込足の床反力(平均値)の比較

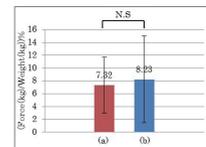
(a)経験群、(b)未経験群

(A)垂直分力(%)

(B)水平分力(%)

(C)側方分力(%)

(n=5)



(C)側方分力(%)

図 5.SP の軸足の床反力(平均値)の比較

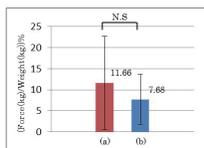
(a)経験群、(b)未経験群

(A)垂直分力(%)

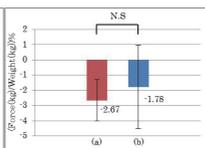
(B)水平分力(%)

(C)側方分力(%)

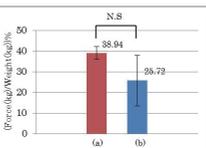
(n=5)



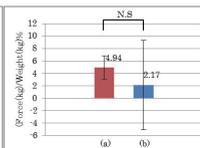
(A)垂直分力(%)



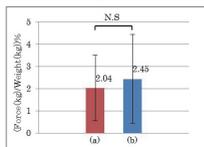
(B)水平分力(%)



(A)垂直分力(%)



(B)水平分力(%)



(C)側方分力(%)

図 6.SP の軸足の床反力(平均値)の比較

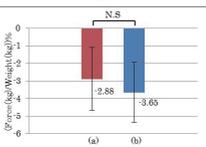
(a)経験群、(b)未経験群

(A)垂直分力(%)

(B)水平分力(%)

(C)側方分力(%)

(n=5)



(C)側方分力(%)

図 7.PT の軸足の床反力(平均値)の比較

(a)経験群、(b)未経験群

(A)垂直分力(%)

(B)水平分力(%)

(C)側方分力(%)

(n=5)

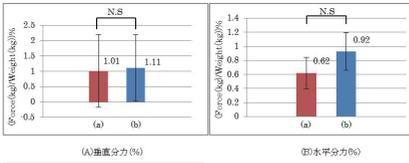


図 8.8趾の踵底足の床反力(標準偏差)の比較

(a) 経線群, (b) 末経線群

- (A) 油直分力(%)
- (B) 水平分力(%)
- (C) 斜分力(%) (n=5)

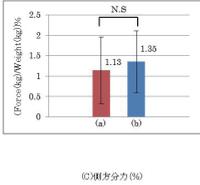


図 9.9趾の踵底足の床反力(標準偏差)の比較

(a) 経線群, (b) 末経線群

- (A) 油直分力(%)
- (B) 水平分力(%)
- (C) 斜分力(%) (n=5)

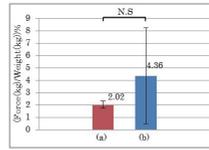


図 10.10趾の踵底足の床反力(標準偏差)の比較

(a) 経線群, (b) 末経線群

- (A) 油直分力(%)
- (B) 水平分力(%)
- (C) 斜分力(%) (n=5)

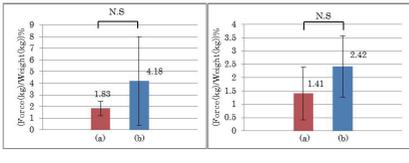


図 11.11趾の軸足の床反力(標準偏差)の比較

(a) 経線群, (b) 末経線群

- (A) 油直分力(%)
- (B) 水平分力(%)
- (C) 斜分力(%) (n=5)

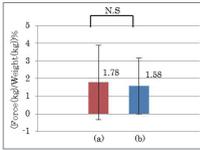


図 12.12趾の軸足の床反力(標準偏差)の比較

(a) 経線群, (b) 末経線群

- (A) 油直分力(%)
- (B) 水平分力(%)
- (C) 斜分力(%) (n=5)

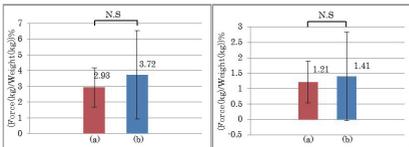


図 13.13趾の軸足の床反力(標準偏差)の比較

(a) 経線群, (b) 末経線群

- (A) 油直分力(%)
- (B) 水平分力(%)
- (C) 斜分力(%) (n=5)

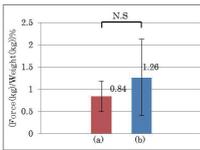


図 14.14趾の軸足の床反力(標準偏差)の比較

(a) 経線群, (b) 末経線群

- (A) 油直分力(%)
- (B) 水平分力(%)
- (C) 斜分力(%) (n=5)

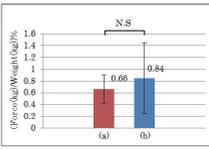


図 15.15趾の軸足の床反力(標準偏差)の比較

(a) 経線群, (b) 末経線群

- (A) 油直分力(%)
- (B) 水平分力(%)
- (C) 斜分力(%) (n=5)

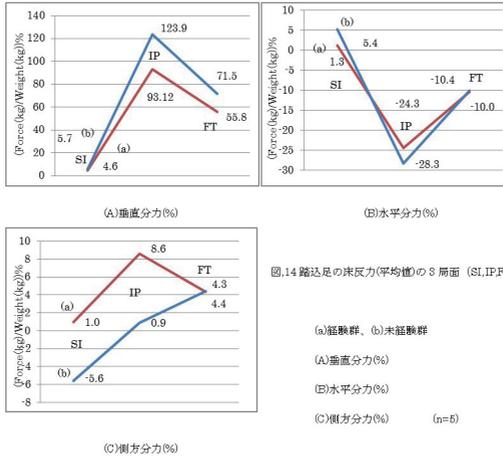


図.14 踏込足の床反力(平均値)の 3 局面 (SI,IP,FT) の変化

(a) 産駒群、(b) 末産駒群
 (A) 垂直分力(%)
 (B) 水平分力(%)
 (C) 側方分力(%) (n=6)

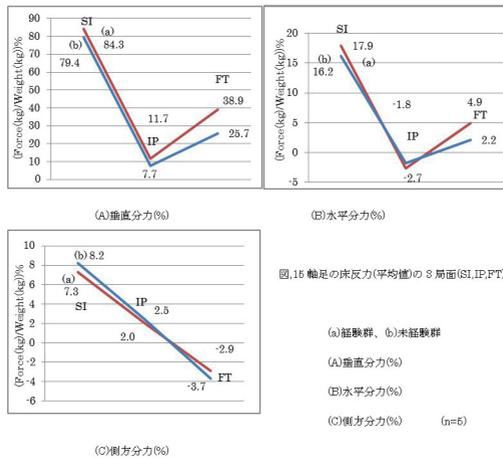


図.15 軸足の床反力(平均値)の 3 局面 (SI,IP,FT) の変化

(a) 産駒群、(b) 末産駒群
 (A) 垂直分力(%)
 (B) 水平分力(%)
 (C) 側方分力(%) (n=5)

大学生の恋愛における嫉妬が

束縛行動に及ぼす影響について

森崎 加菜

田中 成美

百北 朱里

一. はじめに

恋人が異性と二人だけで出かけた。友人が自分の嫌いな友人と仲良くしている。会社の同期が自分よりも周りから認められている。恋愛面であれ、友人関係であれ、社会的場面であれ、このような状況を不快に感じる、嫉妬感情を抱いたことのない人はいないであろう。嫉妬とは、「自分が所有しているもの、あるいはかつて自分が所有していたものを他人に奪われた時、またはその事態を想像した時に生じる感情。嫉妬は愛情に関係したものであり、関係性が脅かされた時に生じる。」とされている。

る(社会心理学用語辞典 北大路書房)。一般的には男性より女性の方が嫉妬深いという意見が浸透していると思われる。例えば、中国では綺麗な女子の同級生に嫉妬した一三歳少女が同級生を殺害するという事件が起こった。このように、嫉妬は人間関係の亀裂だけでなく、これが高じると取り返しのつかない深刻な問題を引き起こす可能性もある。誰もが抱くこの「嫉妬」という感情の原因やその影響に焦点を当てて現代の大学生が男女の恋愛関係においてどのような状況で嫉妬し、その嫉妬にはどのような要因が関係しているのか解明することを本研究では目的としている。

二．問題の所在

嫉妬の情動が起こる過程には三つの段階がある。「①社会状況の中に存在する格差の自覚と当事者が自尊心への刺激を認知するまでの過程（認知過程）②その認知に動機づけられ、自尊心の防御を求めてさまざまな内的試行錯誤を行う過程（内的過程）③次いでその試行錯誤の結果、あらためて状況的現実に対応する過程（反応過程）」である。つまり、嫉妬感情の喚起は「理不尽にも不当に傷つけられた自尊心」を救済するメカニズムに基づいている（石川、2009）。このことから、北村・緒賀（2011）は同じように自尊心が刺激される自己嫌悪な状況におかれても、自尊心が傷つけられるかどうかに関連するのは自己愛の障害であると考えた。

自己愛的傾向とは「自己を価値あるものと感じようとし、それを認めてもらおうとする傾向」である。自己愛の障害には Kernberg（1975）が主張する、周囲を気にかけない「無関心型」と Kohut（1971;1977）が主張する、周囲を過敏に気にする「過敏性」の二種類があるとされている。

そこで北村・緒賀（2011）は高橋（1998）のナルシズム尺度を用いて、「周囲を気にする傷つきやすいナルシズム」である過敏性と、「自己を大きく、美しく思い描きたいという誇大的なナルシズム」である誇大性の二つに自己愛を分類し、これらが嫉妬にどのように影響するかを検討した。この研究では、「誇大性ナルシズム」においては男性のほうが女性に比べ有意に高く、逆に「過敏性ナルシズム」は女性の方が男性よりも有意に高いことが確認された。また、誇大性ナルシズムが強ければ男女ともに社会的関係における嫉妬場面では相手に対して不満を抱きやすく、過敏性ナルシズムが強ければ自分の中にため込んで我慢してしまいやすいことが示された。また、自己愛的傾向と社会的比較における嫉妬との関係で男性は過敏性ナルシズムが高いと嫉妬感情の中の拒否行動の傾向が示された。このことから男性は自分よりかっこよく優秀な人を見た時に、過敏性ナルシズムが強ければ羨ましさといがみの感情が湧き、苛立ちを感じやすくなると解釈された。

同様に、堤（2006）は束縛行動に関する因子は、「注目・賞賛欲求因子」とのみ有意な関係があったと述べて

いる。この「注目・賞賛欲求因子」は自己愛の因子であり、誇大的自己像に執着し、他者からの賞賛を求める一方で、他者からの批判には正当なものでも、傷つき反発しがちであるとされる。つまり嫉妬や束縛行動に対して、北村・緒賀(2011)の誇大性ナルシズムは堤(2006)の「注目賞賛因子」と類似した影響を及ぼすといえる。

さらに北村・緒賀(2011)は自尊心と嫉妬の関係を調査によって検討した。自尊心(自尊心と同じではないが類似した概念、以下自尊心とする)とは自己価値や自己尊重、あるいは単に自己評価とも表現される。自尊心の低い人の特徴は恥ずかしがりやすく、安易に当惑し、説得されやすく、他者からの承認を求める欲求が強い。自尊心が高すぎる場合には虚栄心、または逆に低すぎる場合は自己卑下や劣等感を持つと考えられている。

北村・緒賀(2011)は社会的関係における嫉妬場面では、自尊心が低いと、嫉妬感情の「不満」「混乱」が高くなり、社会的比較における嫉妬場面では自尊心が低いと嫉妬感情の「苛立ち」「あきらめ」が高くなり、拒否行動を強めることを確認した。要約すると、社会的

関係場面と社会的比較場面では、自尊心が低いほど嫉妬心が強まり、逆に、自尊心が高いほど嫉妬心を感じにくくなることを意味している。また武藤、佐久間、岩本(2006)によると、青年期には男性は「自己を大きく、美しく思い描きたいという誇大的なナルシズム」の傾向が高いため、女性より自尊心が高いとされている。

藤島(2010)は、自己評価の高低と社会的望ましきとの関係について検討を加えている。その結果、自己評価の高い人は社会的に望ましくない人よりも社会的に望ましい人に好意を示し、逆に、自己評価の低い人は社会的に望ましい人より社会的に望ましくない人に好意を示すことを報告している。

この結果について藤島(2010)は、自己評価の高い人の場合、自分と釣り合う人に好意を示すという「類似性」の効果が作用したと指摘している。逆に、自己評価の低い人の場合、主観的には自分は社会的には望まれていないと考えており、そのため社会的な望ましさを兼ね備えている人に魅力を感じるけれど拒絶の恐怖も感じてしまい、その魅力が弱まっているのではないかと推測している。また自己評価の低い人は自己と類似した社会的

に望ましくない人物を低く評価すれば、自分の評価も低くしてしまうため、それを回避すべく、社会的に望ましくない人への好意を高めている可能性が示唆される。

これらの結果を整理すると、嫉妬心を規定する要因として、自尊感情や自己愛、束縛心、束縛行動、劣等感などが考えられる。また従来の研究では社会的関係における嫉妬に焦点が当てられていたが、大学生の場合、恋愛関係における嫉妬心や束縛行動を中心にした方が身近で切実な問題であり、関心も高いと考えられることから、以下の仮説を設定し、その妥当性について検討を加えることとした。

仮説の設定

仮説1

誇大性ナルシシズムが高い男性ほど嫉妬心が高いであろう。

(注目賞賛欲求の高い人は、他人への評価が高いと自分への評価は相対的に下がり妬み感情が喚起されるとされているので、類似した特徴を持つ誇大性ナルシシズムの人も同じような傾向を示すのではないかと予測した。)

仮説2

自尊感情の高い男性ほど束縛行動を取ろうとしないであろう。

(自尊感情の高い男性は自分に自信があるので束縛行動をしないのではないかと予測した。)

仮説3

過敏性ナルシシズムの高い男性ほど女性に対する束縛行動が強くなるであろう。

(過敏性ナルシシズムの高い男性は「うらやましき」「ひがみ」感情を抱くため、女性を束縛しようとすることが予測された)

三. 方法

(一) 予備調査

大阪経済大学人間科学部松田ゼミ三・四回生二二名(男性一二名、女性一〇名)を対象に、二〇一四年七月上旬のゼミナール中に質問紙調査を実施し、回答を得た。なお、回答後に被験者に問題や記述の意味が理解できたか

どうか確認し、指摘された点を修正したのち、本調査で使用する調査票の作成を行った。

(2) 本調査

① 調査対象者

大阪経済大学の「人間関係の心理学」「産業・組織心理学Ⅰ」の受講生一三名(男性六名、女性五二名)を対象とした。

② 調査時期

二〇一四年七月下旬から一〇日間の調査期間を設けた。調査の手続きは Web 上で匿名のアンケート形式で実施した。

(3) 調査票の構成

調査票は、調査対象者の基本的属性、「自尊感情」「束縛心」「自己愛」「劣等感」「嫉妬心」「束縛行動」の六つの尺度から構成された。

(4) 調査対象者の基本属性

調査対象者の基本属性を検討するために、学部、学年、

性別、年齢、恋人の有無などの五項目を独自に作成した。

(5) 各尺度の構成

① 自尊感情尺度

自尊感情を測定する項目は、Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) を日本語訳した Miura & Griffiths(2007) の日本語版 RSES の一〇項目を採用した。Rosenberg 自尊感情尺度は一〇項目からなる自己記入尺度で、通常一因子で検証されることが多く、得点が高ければ高いほど自尊感情が高いことを示す。これを参考に我々は、回答者に「強くそう思う(4)」「そう思う(3)」「そう思わない(2)」「強くそう思わない(1)」の四件法で回答を求めた。

② 束縛心尺度

束縛心を測定する項目は、伊福、徳田(2006)や水野(2007)、椋山女学園大学の学生が作成した論文「遠距離恋愛における気持ちの揺れ動きと孤独感の関連性について」(2010)を参考に質問項目一二項目を作成した。参考にした質問項目は一因子で構成されることが確認されている。本研究では「たびたび感じる(4)」「どちらか

といえは感じる(3)」「どちらかといえは感じない(2)」「決して感じない(1)」の四件法で回答を求めた。束縛心尺度は、得点が高いほど束縛心を抱きやすいことを示す。

③自己愛尺度

自己愛を測定する尺度は、過敏型自己愛傾向と無関心型自己愛傾向の両方を測定できるナルシズム尺度(高橋, 1998)の二五項目を採用した。この尺度は二因子で構成されることが確認されている。ここでは「あてはまる(4)」「あまりあてはまらない(3)」「ややあてはまる(2)」「あてはまらない(1)」の四件法で回答を求めた。自己愛尺度では、得点が高いほど自己愛傾向が強いことを示す。

④劣等感尺度

劣等感を構成する尺度は、YGD性格検査の全一二特性一〇項目のうち、「劣等感」を示す一〇項目を採用した。「はい」「いいえ」「どちらでもない」の三通りで回答を求めた。劣等感尺度では、得点が高いほど劣等感を強く抱いていることを示す。

⑤嫉妬心尺度

嫉妬心を測定する尺度は、春日(2010)が作成した嫉妬場面と嫉妬傾向尺度をより洗練し改変したもの(北村, 緒賀, 2011)を参考に、恋人との関係における嫉妬場面を設定し、質問項目一九項目を作成した。この尺度は二因子で構成されることが確認されている。本調査で用いた嫉妬場面は「あなたには、恋人Xがいる。Xは、あなたと会う約束があつたのにあなたと同姓の見知らぬYに会っている。Xは、あなたと会っているときでもYの話ばかりする」であり、この場面に對して自分に当てはまるものを「当てはまる(4)」「少し当てはまる(3)」「あまり当てはまらない(2)」「当てはまらない(1)」の四件法で回答を求めた。嫉妬心尺度では、得点が高いほど嫉妬を感じやすいことを示す。

⑥束縛行動尺度

束縛行動を測定する尺度は、堤(2006)の嫉妬傾向尺度を参考に、質問項目一〇項目を作成した。この尺度は二因子で構成されることが確認されている。回答前の前提として回答者には「Xをあなたの好きな人(または恋人)」に当てはめてもらい、「どの程度嫉妬(やきもち)をするか、当てはまる数字に○をして下さい」と記述し

た。なお「非常に感じる(4)」「かなり感じる(3)」「少しだけ感じる(2)」「まったく感じない(1)」の四件法で回答を求めた。束縛行動尺度では、得点が高いほど束縛行動に走りやすいことを示す。

四. 結果

(一) 因子分析

自尊感情尺度(二〇項目)、束縛心尺度(一二項目)、自己愛尺度(二五項目)、劣等感尺度(二〇項目)、嫉妬心尺度(一九項目)、束縛行動尺度(二〇項目)についてその構造を明らかにするために、それぞれ因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。まず、自尊感情尺度一〇項目について得点分布を確認したところ、いくつかの質問項目で得点分布の偏りが見られた。しかし得点分布の偏りが見られた項目の内容を吟味したところ、いずれの質問項目についても自尊感情という概念を測定する上で不可欠なものであると考えられた。そこでここでは項目を除外せず、すべての質問項目を以降の分析対象とした。以下すべての尺度に対して同様の対応を行った。

①自尊感情尺度

自尊感情尺度一〇項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、三因子が抽出された。第一因子は五項目で構成され、「6. 時々、自分は役に立たないと強く感じる(.705)」や「9. よく私は落ちこぼれだと思ってしまう(.626)」などに負荷が高いため、『自己嫌悪』と命名した(α 係数=.838)。第二因子は三項目で構成され、「8. 自分のことをもう少し尊敬できたらいいなと思う(.576)」や「1. 私は自分自身に満足している(.551)」などに負荷が高いため、『自己不信』と命名した(α 係数=.718)。第三因子は二項目で構成され、「3. 私には結構長所があると感じている(.647)」と「5. 私には、誇れるものは大して無いと感じる(-.612)」に負荷が高いため、『自信』と命名した(α 係数=.710)。

②束縛心尺度

束縛心尺度一二項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、二因子が抽出された。第一因子は一〇項目で構成され、「4. 恋人の行動を把握しておきたい(.809)」や「9. 四六時中恋人が何をしているのか気になる(.668)」などに負荷が高いため、『束縛』と命

名した (α 係数 = .843)。第二因子は二項目で構成され、「5. 恋人が何をしてもあまり気にならない (.648)」と「10. 恋人と頻繁に連絡を取らなくても平気である (.543)」に負荷が高いため、『放任』と命名した (α 係数 = .560)。

③自己愛尺度

自己愛尺度二三項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、三因子が抽出された。第一因子は一項目で構成され、「13. ちよつとした批判ですぐ傷つけられる (.826)」や「10. 他人から批判されると憂鬱な気分が長く続く (.794)」などに負荷が高いため、『過敏性』と命名した (α 係数 = .885)。第二因子は八項目で構成され、「2. リーダーになる才能を持っている (.784)」や「11. つつもみんなの注目の的である (.744)」などに負荷が高いため、『誇大性』と命名した (α 係数 = .845)。第三因子は三項目で構成され、「24. 集団の中で他人が注目してくれないと非常に傷つく (.584)」や「11. 人よりも常に目立つ存在でありたい (.552)」などに負荷が高かったため、『支配』と命名した (α 係数 = .745)。

④劣等感尺度

劣等感尺度九項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、二因子が抽出された。第一因子は六項目で構成され、「7. すぐうろたえがちである (.769)」や「9. 何かにつけて自信がない (.767)」などに負荷が高いため、『外的不安』と命名した (α 係数 = .824)。第二因子は二項目で構成され、「1. 失敗しないかいつも心配である (.843)」などに負荷が高いため、『内的不安』と命名した (α 係数 = .689)。

⑤嫉妬心尺度

まず、嫉妬心尺度一四項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、二因子が抽出された。第一因子は一〇項目で構成され、「1. 自分はXにとって何なのだろうと思う (.794)」や「8. XはYのことが好きなのではないかと疑う (.742)」などに負荷が高いため、『嫉妬と恐れ』と命名した (α 係数 = .901)。第二因子は四項目で構成され、「13. Xに失望する (.871)」や「11. Xに怒りを感じる (.728)」などに負荷が高いため、『怒り』と命名した (α 係数 = .785)。

⑥束縛行動尺度

束縛行動尺度一〇項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、一因子が抽出された。因子の名前は堤 (2006) の嫉妬傾向尺度を参考に『社会的関係』と命名した (α 係数 = .815)。

(2) 下位尺度間の相関分析

①全体

まず全体のデータについて各因子間の相関分析を行った結果、「外的不安」と「過敏性」に高い正の相関が認められた ($r = .788, p < .001$)。つまり、外的不安が高くなるほど、過敏になることが確認された。また、「自信」と「自己嫌悪」($r = .676, p < .001$)、「自信」と「自己不信」($r = -.626, p < .001$)、「過敏性」と「自信」($r = -.480, p < .001$)、「誇大性」と「自己嫌悪」($r = -.485, p < .001$)、「誇大性」と「自己不信」($r = -.422, p < .001$)、「外的不安」と「自信」($r = -.485, p < .001$)、「内的不安」と「自信」($r = -.405, p < .001$)に負の相関が認められた。つまり、自信がある人ほど自己嫌悪を抱きにくく、また自信のある人が必ずしも自己不信感情を抱くわけではないことが確認された。さらに、他者を気にしやすい過敏性の人は自信

がなく、自分に自信のある誇大性の人は自己嫌悪を抱きにくいことが確認された。その一方で、誇大性の人でも自己不信を抱きにくいという結果も得られた。また外的・内的関係なく劣等感が強い人は自信がないということが確認された。

②男性

次に下位尺度間の相関分析を男女別に分けて分析した。男性の各因子間の相関分析を行った結果、「怒り」と「嫉妬と恐れ」に高い正の相関が認められた ($r = .757, p < .001$)。つまり、怒りを感じやすい人ほど嫉妬心や恐れを感じるということが確認された。また、「自信」と「自己嫌悪」($r = -.584, p < .001$)、「自信」と「自己不信」($r = -.578, p < .001$)に負の相関が認められた。これらは①の全体の結果と同様のことが確認された。

③女性

次に女性の各因子間の相関分析を行った結果「自己不信」と「自己嫌悪」($r = .722, p < .001$)、「誇大性」と「自信」($r = .766, p < .001$)、「外的不安」と「過敏性」($r = .836, p < .001$)、「内的不安」と「過

感性」($t=7.229, p<.001$)、「内的不安」と「外的不安」($t=7.04, p<.001$)、「社会的関係」と「束縛」($t=8.339, p<.001$)に高い正の相関関係が認められた。つまり、自己不信を抱く人は同時に自己嫌悪も抱きやすいうことが確認された。また、外的・内的関係なく劣等感を感じやすい人ほど過敏になることが確認された。さらに、内的不安の人は外的不安も感じやすく、束縛行動をとる人は束縛心を抱くことも認められた。また、「自信」と「自己嫌悪」に高い負の相関が認められた($t=-7.08, p<.001$)。つまり自信のある人ほど自己嫌悪を抱きにくいうことが確認された。

(c) 重回帰分析による検討

①全体

自尊感情尺度の各因子次元を独立変数とし、過敏性を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「自己嫌悪」($\beta = .447, t=4.022, p<.001$)と「自己不信」($\beta = .207, t=1.950, p>.01$)が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。さらに誇大性を従属変数とした重回帰分析では、「自信」($\beta = .493, t=4.604, p<.001$)

が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。また、支配を従属変数とした重回帰分析では、「自信」($\beta = .483, t=3.808, p<.001$)が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。

次に、独立変数は変更せず、外的不安を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「自己嫌悪」($\beta = .380, t=3.435, p<.01$)、「自己不信」($\beta = .274, t=2.591, p<.05$)が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。しかし内的不安を従属変数にしたところ、有意な効果は確認されなかった。次に、自尊感情尺度、自己愛尺度、劣等感尺度の各因子次元を独立変数とし、嫉妬と恐れを従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「過敏性」($\beta = .350, t=2.108, p<.05$)、「内的不安」($\beta = .227, t=1.844, p>.10$)が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。さらに怒りを従属変数とした重回帰分析では「過敏性」($\beta = .473, t=2.610, p>.05$)が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。また上記に嫉妬心尺度を加えた各因子次元を独立変数とし、束縛を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「誇大性」($\beta = .283, t=2.345, p<.05$)、

「支配 ($\beta = .173, t = 1.682, p < .10$)」、「嫉妬と恐れ ($\beta = .211, t = 1.769, p < .10$)」、「怒り ($\beta = .224, t = 2.056, p < .05$)」が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。さらに放任を従属変数とした重回帰分析では「自己不信 ($\beta = -.280, t = 1.922, p < .10$)」、「自信 ($\beta = -.291, t = 1.913, p < .10$)」が有意な負の効果を及ぼすことが確認された。次に、上記に束縛心尺度を加えた各因子次元を独立変数とし、社会的関係を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「誇大性 ($\beta = .239, t = 2.39, p < .01$)」、「外的不安 ($\beta = .177, t = 1.715, p < .10$)」、「嫉妬と恐れ ($\beta = .161, t = 1.825, p < .10$)」、「束縛 ($\beta = .592, t = 8.021, p < .001$)」が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。

以上の結果をパス図に示したものが Figure 1 である。
② 男性

①と同様の方法で、男性のみで重回帰分析を行った。自尊感情尺度の各因子次元を独立変数とし、過敏性を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「自己嫌悪 ($\beta = .460, t = 3.200, p < .01$)」が有意

な正の効果を及ぼすことが確認された。さらに誇大性を従属変数とした重回帰分析では、「自信 ($\beta = .360, t = 2.222, p < .05$)」が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。また、支配を従属変数とした重回帰分析では、「自信 ($\beta = .543, t = 3.422, p < .01$)」、「自己不信 ($\beta = .289, t = 1.762, p < .10$)」が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。

次に、独立変数は変更せず、外的不安を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「自己嫌悪 ($\beta = .448, t = 3.189, p < .01$)」、「自己不信 ($\beta = .280, t = 2.005, p < .10$)」が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。しかし内的不安を従属変数にしたところ、有意な効果は確認されなかった。

次に、自尊感情尺度、自己愛尺度、劣等感尺度の各因子次元を独立変数とし、嫉妬と恐れを従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「内的不安 ($\beta = .278, t = 1.780, p < .10$)」が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。さらに怒りを従属変数とした重回帰分析では「過敏性 ($\beta = .408, t = 1.944, p < .10$)」が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。

次に、上記に嫉妬心尺度を加えた各因子次元を独立変数とし、束縛を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「支配 ($\beta = .347, t = 1.685, p < .10$)」が有意な正の効果およびすことが確認された。さらに放任を従属変数とした重回帰分析では、「外的不安 ($\beta = .400, t = 2.130, p < .05$)」が有意な正の効果、「自己不信 ($\beta = .445, t = 2.450, p < .05$)」、「自信 ($\beta = -.347, t = -1.882, p < .10$)」が有意な負の効果およびすことが確認された。

次に、上記に束縛心尺度を加えた各因子次元を独立変数とし、社会的関係を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「誇大性 ($\beta = .238, t = 2.488, p < .05$)」、「束縛 ($\beta = .581, t = 6.077, p < .001$)」が有意な正の効果、「怒り ($\beta = .244, t = 1.899, p < .10$)」、「放任 ($\beta = -.142, t = -1.682, p < .01$)」が有意な負の効果およびすことが確認された。

以上の結果をパス図に示したものが Figure 2 である。

③女性

①、②と同様の方法で、女性のみで重回帰分析を行った。自尊感情尺度の各因子次元を独立変数と

し、過敏性を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「自己嫌悪 ($\beta = .417, t = 2.226, p < .05$)」が有意な正の効果およびすことが確認された。さらに誇大性を従属変数とした重回帰分析では、「自信 ($\beta = .668, t = 5.087, p < .001$)」が有意な正の効果およびすことが確認された。また、支配を従属変数とした重回帰分析では、「自己嫌悪 ($\beta = .431, t = 1.949, p < .10$)」、「自信 ($\beta = .365, t = 1.865, p < .10$)」が有意な正の効果およびすことが確認された。次に、独立変数は変更せず、外的不安を従属変数とする重回帰分析を行ったところ、有意な効果は確認されなかった。内的不安も同様だった。

次に、自尊感情尺度、自己愛尺度、劣等感尺度の各因子次元を独立変数とし、嫉妬と恐れを従属変数とする重回帰分析を行ったところ、有意な効果は確認されなかった。怒りも同様だった。

さらに上記に嫉妬心尺度を加えた各因子次元を独立変数とし、束縛を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「自己不信 ($\beta = .367, t = 2.255, p < .05$)」、「誇大性 ($\beta = .490, t = 2.039, p < .05$)」、「嫉妬と恐れ ($\beta = .291, t = 2.116, p < .05$)」、「怒り (β

=241, $t=1.821, p<.10$ 」が有意な正の効果を及ぼすことが確認された。さらに放任を従属変数とした重回帰分析では「支配 ($\beta = -.454, t=-2.114, p<.05$)」が有意な負の効果を及ぼすことが確認された。

次に、上記に束縛心尺度を加えた各因子次元を独立変数とし、社会的関係を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、「嫉妬と恐れ ($\beta = 244, t=1.825, p<.10$)」が有意な正の効果を、「束縛 ($\beta = -.671, t=-4.147, p<.001$)」が有意な負の効果を及ぼすことが確認された。以上の結果をパス図に示したものが Figures 3 である。

④重回帰分析結果の男女比較

Figure 2, Figures 3 のパス図を比較したところ、男女間でいくつかの相違点・類似点が見られた。主な相違点としては、男性は「自己嫌悪—外的不安」「自己不信—外的不安」に効果が見られたが、女性には劣等感につながる効果が見られなかった。また、男性は「内的不安—嫉妬と恐れ」に効果が見られたが、女性には劣等感から嫉妬心につながる効果が見られなかった。さらに、男性は「自己不信—放任」「自信—放任」「外的不安—放任」に

効果が見られたが、女性には放任につながる正の効果は見られなかった。また、男性は「誇大性—社会的関係」「支配—束縛」に効果が見られたが、女性には「嫉妬と恐れ—束縛」「怒り—束縛」「嫉妬と恐れ—社会的関係」に効果が見られた。以上が主な相違点である。

類似点としては、男女とも「自己嫌悪—過敏性」「自信—誇大性」「自信—支配」のパスでは有意な正の効果が見られた。

四、考察

本研究は、大学生の恋愛において自尊感情、自己愛、劣等感が、嫉妬心や束縛心、束縛行動へどのように影響しているのかを検討し、また、それらのプロセスにおいて性差があるのかも検討した。

ここでは、仮説に沿って、考察を行う。まず初めに、尺度ごとに因子分析を行った。その結果、自尊感情について三因子が抽出され、第一因子を「自己嫌悪」因子、第二因子を「自己不信」因子、第三因子を「自信」因子と命名した。自己愛について三因子が抽出され、第一因

子を「過敏性」因子、第二因子を「誇大性」因子、第三因子を「支配」因子と命名した。劣等感について二因子が抽出され、第一因子を「外的不安」因子、第二因子を「内的不安」因子と命名した。嫉妬心について二因子が抽出され、第一因子を「嫉妬と恐れ」因子。第二因子を「怒り」因子と命名した。束縛心について二因子が抽出され、第一因子を「束縛」因子、第二因子に「放任」因子と命名した。束縛行動について、一因子が抽出され、「社会的不安」と命名した。次に本研究の仮設の妥当性について検証を行った。

仮説1「誇大性ナルシズムが高い男性ほど嫉妬心が高いであろう。

まず重回帰分析を行い、自己愛の「誇大性」因子と嫉妬心の関連性を検討した結果、嫉妬心への正の関連性は見られなかった。よって、仮説1は支持されなかった。この原因として北村・緒賀(2011)の「異性との交際体験の欠如から性に対する憧れあるいは理想化があると考えられ、嫉妬が喚起される状況でも「不満」感情が低いかもしれない。」という推測が本研究にも当てはまると考えられる。本研究でも、恋人がいると回答した人

は、全体の約二割ほどであった。そのため、自己愛尺度では、自分のことなので回答できたが、第三者が関わってくる嫉妬場面では、実際の嫉妬体験がないために、そのような状況を想像できなかったのだと考えられる。今後の研究では、恋人がいると回答した人だけのデータを新たに収集して、仮説を再検討する必要があるだろう。

しかし誇大性から嫉妬心には関連しなかったが、束縛心を経て束縛行動に影響を及ぼした。この結果は、「誇大自己愛傾向のある人は、攻撃性が強く、欲求不満耐性が低い。」とするKernbergに基づいた上地(2009)の指摘と、「誇大性ナルシズムの強い人が相手に危害を加える可能性のある報復行動を取りやすい」とする北村・緒賀(2011)の指摘から明らかのように、本研究の被験者の場合、自己愛の誇大性は嫉妬心には直接、影響しなかったが、束縛心を通じて束縛行動に効果を及ぼした可能性が考えられる。

つまり束縛心や束縛行動は、当事者と恋人のみの項目であり、嫉妬の対象が含まれていないため、過去の恋愛経験や自らの恋愛観で想像して回答できる内容であったことから、他の変数との関連が現れたものと思わ

れる。つまり誇大性ナルシズムの強い人は上記の上地(2009)や北村・緒賀(2011)の述べていたように攻撃性が強いことや報復行動を取りやすいという攻撃的な行動や思考によって、相手を支配したいという思いや執拗に相手にこだわる束縛心や束縛行動と関連を示したのだと考えられる。

仮説2「自尊心の高い男性ほど束縛行動を取ろうとしないであろう。」

まず自尊心と束縛行動との関連性を検討するため、男性について重回帰分析した結果、自尊心の「自己不信」は束縛心の「放任」に有意な負の関連性を示した。この結果は自己不信の低い男性、あるいは自尊心の高い男性ほど放任しようとするため、束縛行動を取ろうとしないことを意味しており、したがって、仮説2は一部支持されたといえる。

また自己嫌悪と自己不信な自尊心を持つ男性ほど、劣等感の「外的不安」を通じて束縛心の「放任」と有意な正の影響を及ぼしていた。これは、自尊心の低い男性は劣等感を高めて、相手を放任することを意味している。つまり自己嫌悪や自己不信の高い男性は自分に自信

がないために、女性を束縛しようとし、あるいは束縛できないのではないかと考えられる。今後の研究では、仮説1と同様、恋人がいると回答した人だけのデータを再確認する必要がある。

仮説3「過敏性ナルシズムの高い男性ほど女性に対する束縛行動が強くなるであろう。」

まず、過敏性の高い男性と束縛行動の関連性を検討するために、男性について重回帰分析した結果、過敏性は直接、束縛行動に有意な影響を与えないため仮説3は支持されなかった。しかし自己愛の「過敏性」は嫉妬心の「怒り」を経て、有意ではないが束縛行動の「社会的不安」に正の影響を及ぼした。したがって過敏性ナルシズムの高い男性は嫉妬心を通じて束縛行動を示すことが確認されたといえる。

これは北村・緒賀(2011)の過敏性ナルシズムの強い男性は、羨ましさとひがみの感情が湧き、苛立ちを感じやすくなるという指摘が支持されたといえる。つまり、周囲を気にする傷つきやすい過敏性のある男性は、第三者によって脅かされる恋愛場面では、嫉妬心からの苛立ちを感じて、その結果、束縛行動を取ろうとするこ

とを意味している。

また、誇大性ナルシズムの男性も束縛行動との関連性が見られたが、誇大性ナルシズムの男性の場合は、嫉妬心を抱かずに直接、束縛行動を取ろうとすることが確認された。

本研究では本学の学生対象にアンケートを行ったが、本学は男子学生が多いという特徴があるため、仮説も男性中心の仮説が立てられた。今後の研究では女子大学などでデータを収集し、女性を対象としたより詳しい嫉妬心や束縛心、束縛行動へのメカニズムを検討する必要があるだろう。

謝辞

この研究を卒業論文として形にすることができましたのは、担当していただいた松田幸弘教授の熱心なご指導、また、松田ゼミ研究室の皆様や本学の学生が貴重な時間を割いてアンケート調査に協力してくださったおかげです。協力していただいた皆様へ心からの感謝の気持ちと御礼を申し上げます、謝辞にかえさせていただきます。

引用文献

- 石川実 (2009)・嫉妬と羨望の社会学 世界思想社出版
稲永要 (2010)「過敏型」自己愛傾向と自己不完全感および空虚感とその関連 九州大学大学院人間環境学府 11, p. 135-143
- 小塩真司 (2002)・青年の自己愛傾向の研究 ―理論と実証の間― 第3回心理コロキウム資料
- 北村美菜子・緒賀郷志 (2011)・大学生の嫉妬に及ぼす自己愛的傾向の影響 岐阜大学教育学部研究報告・人文科学 60(1), p.145-156
- 社会心理学用語辞典 北大路書房
- 高橋智子 (1998) 青年のナルシズムに関する研究 ―ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成― 日本教育心理学会40回総会発表論文集 p.147
- 堤 雅雄 (2006)・嫉妬と自己愛：自己愛欲求が嫉妬感情を喚起させるのか 島根大学教育学部紀要(人文社会科学) 第39巻 p.39-43

- 深田博己・坪田雄二(1990)・恋愛関係における嫉妬の研究 広島大学教育学部紀要・第一部 38号 p.207
- 藤島喜嗣(2005) 異性の対人魅力に対する社会的望ましさと類似性の効果―調整要因としての関係期間― 昭和女子大学人間社会学部紀要「学苑」第772号 p.11-20.
- 武藤隆・佐久間路子(2006) 自己意識はどのように育つていくのか 人間・環境学, 第20巻, p.1-11.
(人間科学部二〇一四年度卒業生)

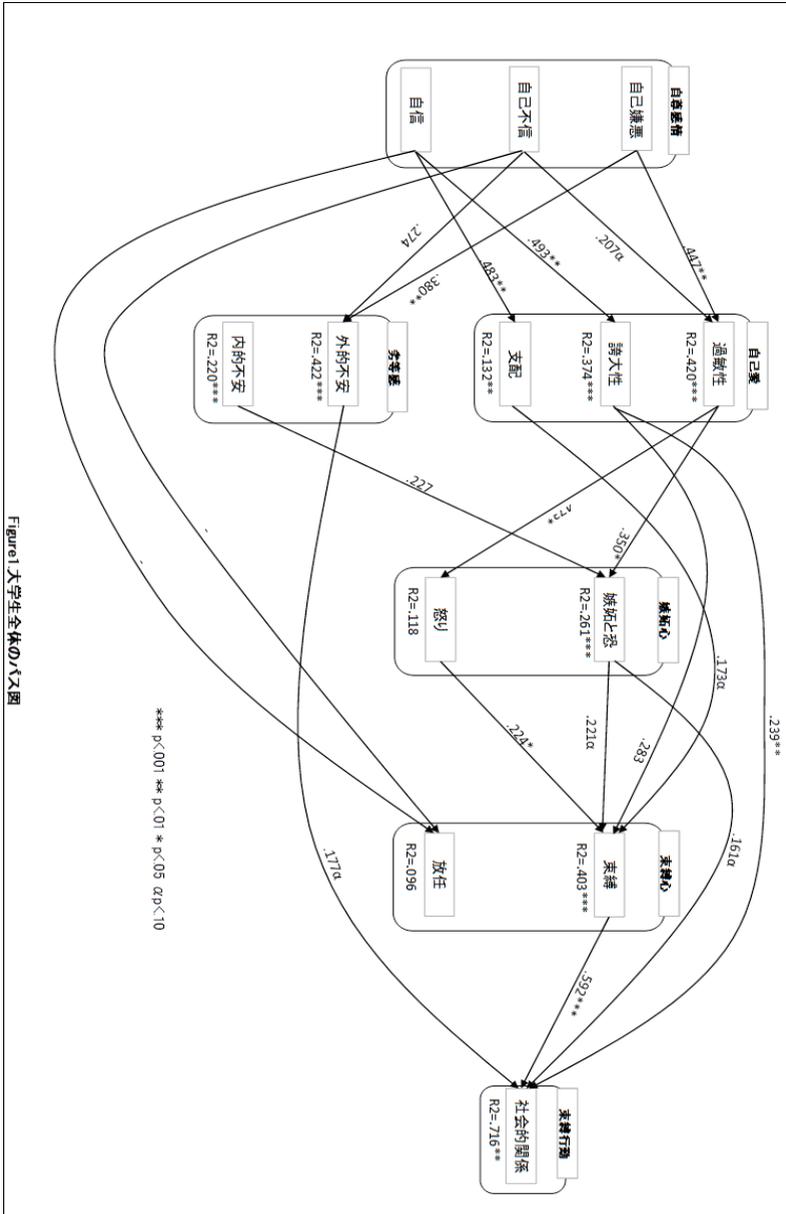


Figure 1 大学生全体のパネル

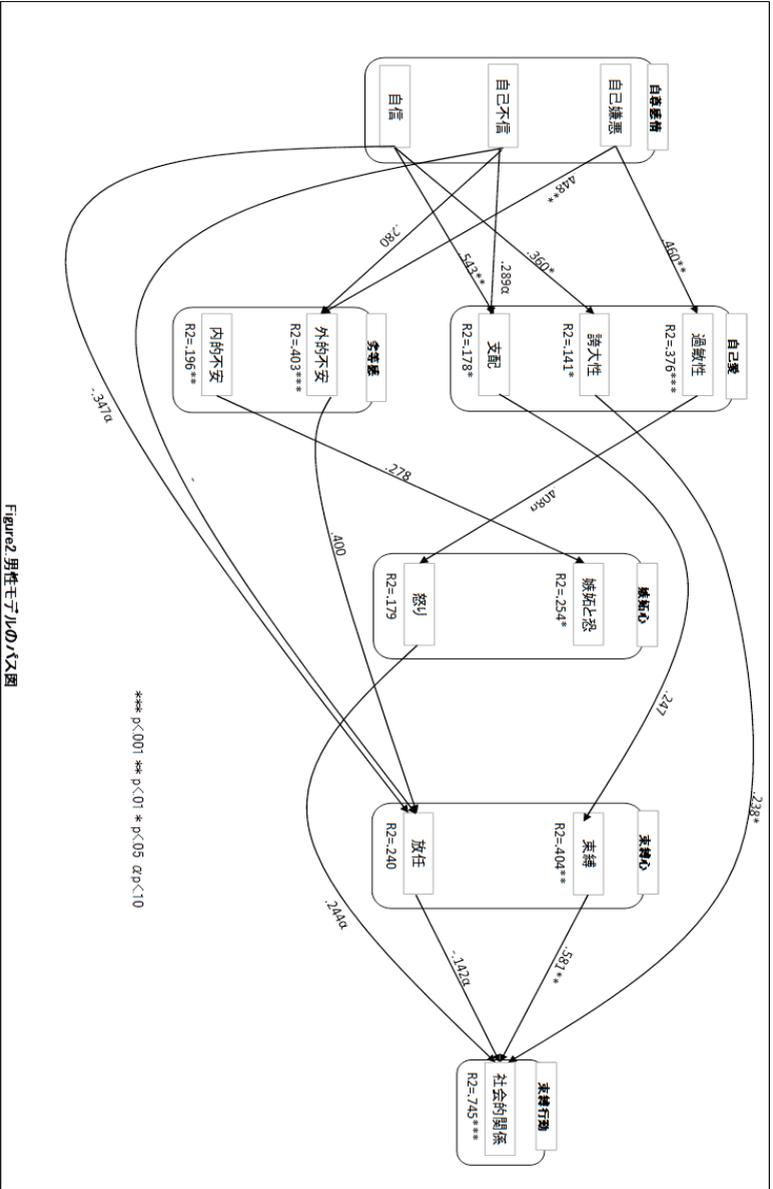


Figure 2 男性主観のパス図

個人の文化的要因と顧客満足・ロイヤリティ

池田 百合絵

第1章 背景と目的

第1節 研究の背景

嶋口 (1994) によると、顧客満足の追求の程度や性格は、時代によって多様に変化する。1950年代、経営におけるマーケティングの役割が「顧客満足 (Customer Satisfaction)」。以下、「CS」という目的のために、事業の中核機能と位置づけられた。CSや顧客志向の重要性が認識される時代であった。1960年代、CSの思想は定着したものの、直接的な政策と評価を引き出すまでには至らなかった。現実には、シェアや利潤が重要視され続けた時代であった。1970年代、CSは、現状の満足状況の測定をベースに、不満をいかに修復し、次なる

積極的な満足向上に向けるべきかという針路を示した。しかし、70年代後半から起こってきた市場の停滞・成熟により、尻すぼみになっていった。1980年代、成熟市場・成熟経済の下で、企業は生き残りをかけ激しい競争対抗を行った。悠長なCSというテーマより、いかに直接的に相手に勝つかという競争戦略が優先された。その帰結として、競争テーマが市場獲得競争であるならば、顧客の満足を得なければ勝利できないという認識が生まれた。

それに伴い、今日「CS」のテーマが経営分野で重要視され、CSの時代といわれるほどになっている。同時に研究面でも幅広く取り上げられている (例えば、川原 (2002)、藤居 (2008) など)。

しかし、個人の文化的要因や価値観に焦点を当てた研究は少ない。日頃、関西人は安く買った商品を、関東人は高く買った商品を、それぞれ自慢したい傾向があるなどと耳にすることがある。そのような消費に関する地域の文化的特徴があるとすれば、経営の分野で重要なテーマとなっているCSやロイヤリティにも地域差があり、地域別の戦略を立てる必要があるだろう。

そこで、本論文は、個人の文化的要因とCS・ロイヤリティの関係について検討するものとする。

ここで、CSとロイヤリティを書き分けることに関して特筆する。CSに関する調査において、しばしば「ロイヤリティ≡CS」という構図が使用されている(例えば、高橋(1998)、Aaker(1994)など)。CSが向上するとロイヤリティもそれに伴い増加するならば、この構図は正しいと言える。しかし、最近、顧客満足度が高まっても売上げが下落するという、「ロイヤリティ≠CS」の事例がいくつか報告されている(Jones et al.(1995)、Zeithaml et al.(1996)など)。佐藤(2000)は、「ロイヤリティ≠CS」を説明しており、山本ら(2000)はこの妥当性について調査し、明らかにしている。このた

め、本論文においても、CSとロイヤリティを書き分けることとする。

第2節 関連する既往研究

(1) 国家間での研究

国を単位とした文化に関する研究や著書は多いが(Hofstede et al.(1991))、そのような文化的要因を考慮してCSやロイヤリティの構造に迫った研究はほとんどない。張ら(2008)の研究に、日本と中国の文化的要因を考慮し、国ごとの文化的要因、CS、ロイヤリティの構造を明らかにしようとした研究がある。この研究では、Hofstedeによる文化の多次元モデル(第1章の第5節で説明する)より、5つの次元を文化的要因と定義して調査されている。

ただし、張ら(2008)の研究に関しては、日本で行われた東京の大学生一五名への予備調査の結果しか発表されていない。

(2) 日本国内での研究

荻久保ら(2008)によると、90年代初頭から、ACSI

(American Customer Satisfaction Index)をはじめとするマクロレベルでの顧客満足度調査が企業、産業、国家経済レベルで行われている。それらのデータを用い、荻久保ら(2007)は9カ国の顧客満足度を比較し、経済自由度や国民文化の影響を指摘した。これを踏まえて、国家レベルの指標は個人のデータをもとに算出されることから、個人レベルでも文化的要因が消費者行動に有効に作用するという仮説を基に、文化的要因(Hofstedeの文化モデルを採用)が顧客満足度に与える影響と、再購買意図へと結びつくメカニズムについて分析している。

調査結果として、個人の持つ文化的要因や価値観が、国家レベルと同様に、顧客満足度や再購買意図に影響することを明らかにしている。加えて、「スイッチングコストが高い場合、文化的要因が顧客満足度に影響を与える」と、「多様性追求欲求とスイッチングコスト」と顧客満足度が、再購買意図に影響を与える」ことを分析により説明している。

これらの結果は、マーケティングや製品開発にも応用できる。例えば、製品やサービスのスイッチングコスト

を高めると、顧客を囲い込むことができるが、個人主義の高い顧客層には通用しづらく、不確実性の回避の高い顧客層にはCSの低下を招く可能性がある。

第3節 研究の目的

前節で紹介した荻久保ら(2008)の調査で、個人の文化的要因が、顧客満足度やロイヤリティと関係があることが示された。日本国内の各地域における文化的特徴が明らかになれば、地域に適した新たなマーケティング戦略の有効性を示すことが可能であると考える。加えて、地域別の文化的要因を考慮してCSやロイヤリティの構造を分析することの必要性を明らかにできるだろう。

本研究では、日本人には地域別の文化的特徴があるのかを明らかにすることで、新たなマーケティング戦略の可能性を見出すことを目的とした。

第4節 論文の構成

本研究は、「第1章 背景と目的」「第2章 研究の方法」「第3章 結果及び考察」「第4章 結論」から構成される。

第1章では、本研究の関連分野、特にCSについての背景や、これに関係する研究について、既往文献を参考に説明する。そこから、本論文の重要性を示す。

第2章では、本研究の調査方法について記述する。

第3章では、調査結果をまとめ、そこから考えられることについて述べる。

第4章では、本研究を通して明らかになったことや、今後の課題について述べる。

第5節 本研究に用いる重要な術語

(1) ロイヤリティ (loyalty)

デジタル大辞泉(小学館, 2014)によると、「ロイヤリティ」とも「忠誠心, また誠実さを意味する。さらに, imidas (集英社, 2008) によると, マーケティングにおいては, 好き, 信頼している, ずっと利用したいということを目指す。特定のブランドに対するロイヤリティをブランド・ロイヤリティと呼び, このブランドが好き, これに決めている, ずっと使いたいという状況を作り出すことをいう。

(2) Hofstede の多次元モデル

Hofstedeら(1991)は、国民文化の違いを表す指標として、文化の多次元モデルを開発した。それによると、全6種類の次元についての定義と説明は、以下のようになる。

① 「権力格差」

それぞれの国の制度や組織において、権力の弱い成員が、権力が不平等に分布している状況を予期し、受け入れている程度である。

権力格差の小さな組織では部下は上司に依存するのでなく、上司から相談されることを好んでいる(相互依存)。反対に、権力格差の大きな組織では、部下は上司にかなり依存している。

② 「個人主義」-「集団主義」

価値観および行動形式において個人を重視する度合いのことである。

個人主義を特徴とする社会では、個人と個人の結びつきはゆるやかである。人はそれぞれ、自分と肉親の面倒をみればよい。個人主義の強い文化の人々は、「個人の時間」「自由」「やりがい」を重視する。

集団主義を特徴とする社会では、人は生まれたときから、メンバー同士の結びつきの強い内集団（個人の属する集団）に統合される。人はその集団から生涯にわたって保護される。集団主義の強い文化の人々は、「訓練」作業環境」「技能の発揮」を重視する。

③ 「男性らしさー女性らしさ」

社会生活での男女の性別役割の明確さや、自己主張の強い態度が望まれる度合いを表す。

感情面での性別役割が明確に区別できる社会は男性らしいといわれる。男性らしい社会では、男性は自己主張が強くたくましく物質的な成功をめざすものだと考えられており、女性は男性より謙虚で優しく生活の質に関心を払うものだと考えられている。

感情面での性別役割が重なり合っている社会は女性らしいといわれる。女性らしい社会では、男性も女性も謙虚で優しく生活の質に関心を払うものだと考えられている。

④ 「不確実性の回避」

ある文化の成員があいまいな状況や未知の状況に対して脅威を感じる程度である。

不確実性の回避の強い文化の人々は、忙しそうで、ソワソワとしていて、感情的で、攻撃的で、疑い深い。

不確実性の回避の弱い文化の人々は、鈍重で、物静かで、気楽そうで、無気力で、抑制されていて、怠惰である。

⑤ 「長期志向ー短期志向」

長期志向は将来の報酬を志向する徳、なかでも忍耐と儉約を促す。

短期志向は過去と現在に関する徳、なかでも伝統の尊重、「面子」の維持、社会的な義務の達成を促す。

⑥ 「放縦ー抑制」

放縦は、人生を味わい楽しむことにかかわる人間の基本的かつ自然な欲求を比較的自由に満たそうとする傾向を示す。

抑制は、厳しい社会規範によって欲求の充足を抑え、制限すべきだという信念を示している。

(c) スイッチングコスト (switching cost)

顧客が、利用している商品・サービスを別の企業の商品・サービスに切り替える際に、負担する費用。変更手続きの複雑さなどに起因する心理的な負担なども

含まれる。乗り換えコスト。スイッチング費用。(『デジタル大辞泉(小学館, 2014)』)

(4) 多様性追求欲求

特に理由もなく過去にもっとも好んでいたブランドから他のブランドへ移ることや、不規則に複数のブランド間でスイッチング行動を繰り返すことである。

好奇心、変化に対する願望や製品選択におけるリスクテイキング行動などといった個人の価値観に依存する。(荻久保ら (2008))

第2章 研究の方法

荻久保ら (2007, 2008) の調査で、CSとロイヤリティに関係する文化要因は、Hofstedeによる多次元モデルのうち、「個人主義-集団主義」と「不確実性の回避」の2つの次元だと明らかにされている。そのため、この2つの次元に絞った文化的要因に関して、日本人には地域別の文化的特徴があるのか、既存研究の調査を行った。

第3章 結果及び考察

第1節 CSとロイヤリティに関する研究

第1章第2節において、日本国内における関連研究として紹介した荻久保ら (2008) の研究について、結論に至った内容に関して詳しく説明する。

荻久保ら (2007) の研究で、日本を含めた9カ国のCSの3年分のデータとHofstedeの各文化次元(権力格差・個人主義-集団主義・男性らしさ・女性らしさ・不確実性の回避の4つの次元を採用している)との相関を分析した。その結果、CSは4つの次元の中で、「不確実性の回避」と有意な負の相関を、「個人主義-集団主義」と有意な正の相関があることを明らかにした。

この結果から、荻久保ら (2008) は、2つの仮説を提示した。

仮説1として、国家レベルの分析と同様に個人レベルでも、CSは「不確実性の回避」と負の相関があり、「個人主義-集団主義」と正の相関があると予想した。

さらに、ロイヤリティの要因として広く研究されているのは、文化から派生する価値観の中では多様性追求欲

求である。このことから、「個人主義」集団主義」が高く、「不確実性の回避」が弱い人ほど、リスクを恐れず新しいものを試そうとする傾向が強いため、多様性追求欲求は「個人主義」集団主義」と正の相関があり、「不確実性の回避」と負の相関があると予想した。

仮説2として、「個人主義」集団主義」は多様性追求欲求に正の影響を与え、「不確実性の回避」は負の影響を与えると予想した。

また、多様性追求欲求はロイヤリティに負の影響を与えるが、その影響の強さは製品・サービスによって異なると予想した。

これらの仮説を検証するために、文化的要因・多様性追求欲求・スイッチングコスト・CS・ロイヤリティを問うアンケート調査を、関東地区の学生と社会人に対して実施した。調査の対象としたのは、4製品(テレビ・パソコン・シャンプー・携帯電話端末)および4サービス(携帯電話会社・美容院(理髪店)・ポータルサイト・銀行)であった。

仮説1を検証するために行った分析で、スイッチングコストの高い層のみについて、「個人主義」集団主義」

が高く、「不確実性の回避」が弱いほど、CSが高いという結果を得た。国家レベルの研究結果と同じ傾向である。

仮説2を検証するために行った分析では、多様性追求欲求には、「不確実性の回避」による負の影響、「個人主義」集団主義」による正の影響、さらに「男性らしさ」女性らしさ」による正の影響が確認できた。また、多様性追求欲求はロイヤリティに負の影響を与えるが、その強さは製品・サービスによって異なるということも明らかにした。

第2節 地域別の文化的特徴に関する研究

(1) 「個人主義」集団主義」

① 放送大学における研究

大橋(2006)によって、放送大学の持つ各地の学習センター(文京・埼玉・世田谷・島根・福岡・富山・茨城・岐阜・熊本)において行われた調査についてまとめる。

「個人主義」集団主義」という概念は、異文化コミュニケーションの分野では文化の違いを説明する際に最も頻繁に使われる概念である。多くの研究者たちが、アメリカは個人主義的で、日本は集団主義的であるとしてい

る。しかし、研究が進むにつれ、アメリカ人より日本人の被験者の方が、個人主義尺度の得点が高いという事象が度々見られるようになった。この原因は、日米の大学生を被験者としていたことに求められた。大学生同士を比べた調査結果がどこまで一般化できるのか、また都市部の学生を被験者とした場合、地方の日常生活にどこまで一般化できるのかという疑問が生まれた。このため、放送大学の持つ各地の学習センターの様々な年齢層を対象に調査を実施することで、日本国内での文化の地域差や年齢差の程度を検証した。

個人主義・集団主義の尺度、性別、学習センターの所在地、年齢を調査項目としたアンケートを実施し、地域差と男女差、そして年齢差について分析を行った。その結果、「個人主義」・「集団主義」に地域差や年齢差はあまり見られなかった。男女差は存在することが示された。加えて、日本人は必ずしも個人主義尺度の得点より、集団主義尺度の得点の方が高いとはいえないという結果が得られた。つまり、日本は集団主義社会であるとはいえない。

②都市近郊農村における研究

齋藤ら(2010)によって、都市近郊農村(千葉県)において、30代から50代の労働者と、年齢層の高い退職者に対して行われた研究についてまとめる。

近年、大都市において個人主義が深度化してきた。農村においては、子どもの遊びが都市化している実態が明らかになっている。農村社会の大人についても、その生活が都市化しているのではないかという仮説を基に、農村住民の個人主義化を明らかにすることを目的とし、ヒアリング調査を実施した。

調査結果をまとめると、労働者は、個人もしくは家族で過ごすことが多かった。同時に、退職者も地域活動への参加は必ずしも活発でなく、個人的に孤立していることが明らかになった。

(2) 「不確実性の回避」

「不確実性の回避」に関して、地域差に迫った研究は確認できなかった。しかし圓川ら(2013)は、「不確実性の回避」という性向の消費者態度への影響について調査している。これについてまとめる。

CSの要因としての消費者態度に、個人の文化性向の1つである「不確実性の回避」が影響することがわかっており、性別・年齢・職業という属性の影響の大きさについて分析した。調査対象は、首都圏・富山・名古屋の、学生および社会人である。ただし、サンプルのCSが首都圏のものであることから、地域差については分析されていない。

分析の結果、「不確実性の回避」は、職業とやや関連を持ち、性別・年齢とは関連を持たないことが示された。

第3節 考察

今回、日本人には地域別の文化的特徴があるのか、ということについて「個人主義―集団主義」と「不確実性の回避」の2つの次元から文献調査を行った。

その結果、「個人主義―集団主義」について調査した文献では、どの地域も集団主義的な文化ではなかった。同時に、地域による差を見出すこともできなかった。

その一方で、「個人主義―集団主義」には性別差が、「不確実性の回避」には職業差があることがわかった。

Hofstede (1991) は、「個人主義―集団主義」の

程度は、各国間で異なるだけでなく、1つの国の内部においても明らかに差異がある」としていた。そのため、この結果は予想外のものであった。ただ、「個人主義―集団主義」の地域差に迫った大橋(2006)の研究は、日本国内の全地域で調査を実施したものではない。このことから、この調査結果を全地域に一般化できるかという点では、疑問が残る。

また、Hofstedeの提唱する文化の多次元モデルを基に実施された調査が少なかったことから、本調査の結果は不安定なものであるかもしれない。

第4章 結論

第1節 本研究を通して明らかになったこと

Hofstedeによる多次元モデルのうち、「個人主義―集団主義」と「不確実性の回避」の2つの次元が、CSとロイヤリティに関係する文化的要因であると明らかにされている。このことから、日本において文化的要因に地域差があることを確認できれば、地域ごとにCSやロイヤリティの構造について調査する必要性や、地域ごとに

マーケティング戦略を考慮する必要性を示すことができると考えた。

結果として、地域による文化的要因の違いはなく、性別や職業による違いが存在することがわかった。このことから、地域別にマーケティング戦略を練ること、またCS・ロイヤリティの構造を分析する必要はないと思われる。そして、性別・職業という属性を考慮したマーケティング戦略が有効であるのではないかと考えられる。また、これらの属性別に、CS・ロイヤリティの構造を分析することにも意味があるだろう。

第2節 今後の課題

考察において指摘した通り、Hofstedeの提唱する文化の多次元モデルを基に実施された調査が少なかつた。日本人は海外諸国の人々と比べて集団主義であるというイメージがあるためだろうか、「個人主義―集団主義」に関する研究はいくつか見受けられた。しかしながら、「不確実性の回避」に関する研究は、満足できる量の既存研究が存在しなかった。

このため、実際にアンケート調査を実施してみれば、

また違った結果を導き出したのではないかと考える。

また、本研究を通して、性別・職業という属性と、文化的要因に関連があることがわかった。よって、このことを実際に確認する研究をしてみることが、有意義であると思われる。具体的には、本学の学生とその保護者に対してアンケート調査を実施することにより、興味深い結果を得ることができると考えられる。

引用文献

- 圓川隆夫、Frank Bjorn、Herbas Torrico (2013)、「日本の製品・サービスを対象とした不確実性回避性向の消費者態度への影響メカニズムの解明」、日本経営工学会論文誌、ISSN 1342-2618, 01/2013, 巻63, 号4, pp. 201 - 209
- 大橋理枝 (2006)、「縦型／横型―個人主義／集団主義の性差・地域差・年齢差について」：放送大学生の場
合、放送大学研究年報、ISSN 0911-4505, 2006, 巻24, pp. 93 - 100
- 荻久保瑞穂、黄政、圓川隆夫 (2008)、「個人レベルの

- 文化的要因が顧客満足度と再購買意図に及ぼす影響` Journal of the Japanese Society for Quality Control 38(2), pp.63-72, 2008
- 荻久保瑞穂, 圓川隆夫 (2007) ` Cross National Analysis of Customer Satisfaction, Economic Institutions and Cultural Factors., Journal of Japan Industrial Management Association, 58, [3], 167-172
- 齋藤雪彦および須川陽平 (2010) ` 都市近郊農村における余暇活動の実態と個人主義化, 学術講演梗概集・E2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, ISSN 1341-4526, 07/2010, 巻 2010, pp. 557 - 558
- 佐藤知恭 (2000) ` 実践段階に入った顧客ロイヤルティ・トネジメント, 白鷗大学論集, ISSN 0913-7661, 2000, 巻 14, 号 2, pp. 1 - 100
- 嶋口充輝 (1994) ` 顧客満足型マーケティングの構造―新しい企業成長の論理を求めて―有斐閣
- 集英社 (2008), imidas, (<http://japanknowledge.com/>)
- 小学館 (2014) ` デジタル大辞泉` (<http://japanknowledge.com/>)
- 高橋郁夫 (1998) 買物行動における消費者満足プロセス, 三田商学研究, ISSN 0544-571X, 04/1998, 巻 41, 号 1, pp. 85 - 99
- 張哲, 朝日弓未, 山口俊和 (2008) ` 日本と中国の文化要因を考慮した顧客満足とロイヤルティの構造に関する研究, 日本オペレーションズ・リサーチ学会秋季研究発表会アブストラクト集 2008, 54-55, 2008-09-10
- 藤居誠 (2008) ` 生活満足の購買行動―生活の充実感を左右する要因の分析―, 日本行動計量学会大会発表論文抄録集, 09/2008, 巻 36, pp. 95 - 96
- 川原直毅 (2002) ` 消費者購買行動と顧客満足に関する一考察, 修道商学, ISSN 0387-5083, 09/2002, 巻 43, 号 1, pp. 353 - 380
- Aaker, D. A. (1991), Managing Brand Equity, illustrated edition, Free Press. (陶山計介, 中田善啓, 尾崎久仁博, 小林哲訳 (1994) ` ブランド・エクイティ戦略: 競争優位をつくりだす名前, シ

ンボル、スローガン、ダイヤモンド社)

Hofstede, G., Hofstede, G.J., and Minkov, M. (1991),

Cultures and Organizations: Software of the

Mind, 3rd ed. (岩井八郎、岩井紀子訳 (1995))、

多文化世界：違いを学び未来への道を探る、有斐閣)

Jones, T. O. and Sasser, W. E. (1995) , Why

Satisfied.33 Customer Defect, Harvard Business

Review, Nov. - Dec., pp. 88-99

Zeithaml, V. A., Berry, L. L. and Parasuraman, A.

(1996) , The Behavioral Consequences of

Service Quality, Journal of Marketing, Vol.60,

April, pp. 31-46

謝辞

本論文を遂行するにあたり、ご指導、ご協力を頂きました小松亜紀子先生に、心から感謝いたします。テーマ選びの段階から添削、そして論文の完成に至るまで、本当に親身にご指導くださいました。

また、小松ゼミの同期の皆さんにも感謝します。中間

発表などでいただいた意見や気づきは、大変参考になりました。

なかなか執筆が進みませんでした。皆さんのおかげで無事に論文を書き終えることができました。この卒業研究を通して、自分の持つ情報を、他人に正確に伝えることの難しさを実感したとともに、これを養うことができたと感じます。また、充実感と自信を得ることができました。本当にありがとうございます。

(二〇一四年度人間科学部卒業予定・小松亜紀子ゼミ)

学士力と卒業論文

江藤 幹

過ごしやすい秋から、寒さの厳しい冬へ季節が変わる頃、卒業論文の執筆はいよいよ大詰めを迎えます。これまでのんびりと大学生生活を過ごしていた学生たちも表情を一変し、真剣に論文と向き合う姿が、冬の訪れを知らせているように感じます。一つのテーマについて、約一年間集中して向き合うことなど、卒業論文の執筆が課されなければ、なかなか経験できることではありません。卒業論文の執筆は、関連分野についての知識を深め、研究計画を立てるところからはじまります。その後、データを収集して統計分析を施し、本文の執筆にうつります。研究成果をアピールするために、発表の機会が設けられることも多いでしょう。手順としては明解な卒業論文の作成ですが、執筆（作成）に求められる能力は、文章力、

情報収集能力、分析力に留まらず、コミュニケーション力、企画力、時間管理能力、言語力、語学力、忍耐力、表現力など、実に広範囲に渡ります。卒業論文の執筆を経験した多くの者が、一度は逃げ出したくなったものではないと思います。しかし、卒業論文は、最後で最大の修学の機会です。学生には、大学四年間（またはそれ以前から）の集大成として、学位の取得だけにとらわれず、積極的に取り組んでほしいと願っています。

大学関係者の間で近年、「学士力」という言葉に注目が集まっています。文部科学省の中央教育審議会「学士課程教育の在り方に関する小委員会」がまとめた審議経過報告のなかで提言した考え方で、学士課程で身に付けべき能力を、国が「学士力（仮称）」という参考指針

の形で示そうというものです。具体的には、①知識・理解、②汎用的技能、③態度・志向性、および④総合的な学習経験と創造的思考力が挙げられています。一見、広範囲に渡る多様な技量を求められるように感じる「学士力」。大学生活の四年間を費やして身につける能力と言えれば納得できるかも知れません。しかし、これらの能力は、卒業論文を書き上げること、ほとんどが身に付く能力であると考えることができます。

私自身、学生時代の思い出はたくさんありますが、特に印象深いのが卒業論文です。四年生になる頃にはすでにデータ収集を終えており、他の単位と同様に余裕を持ってパスできるだろうと安心していました。しかし、気付けば多くの友だちに先を越されており、後半では論文の方向性に悩みなかなか筆が進みませんでした。そのようなペースが最後まで続き、最終日には文字通り走って提出する結果になりました。さらに悪いことに、提出時に題目の誤字が見つかり、訂正手続きを取っている間に締め切り時間が過ぎてしまいました。私の卒業は、学科会議での審議が必要な「条件付き」となってしまいました（会議の結果、無事に卒業できました）。

私の場合、時間管理能力や計画性といった「学士力」が不足していたのだと、深く反省しました。また、卒業が危ぶまれたというインパクトも手伝って、このような自分の欠点を自覚することになり、（他にもあるたくさん）の欠点の中でも特に）卒業論文のような同じ失敗を二度と繰り返さないよう、行動に繋がられるようになってと思います。卒業論文が無ければ、これらの失敗は無く、自分の不足している能力に気付くこともできず、社会に出ていたかも知れません。

卒業論文は学生としての自分の足跡です。私のような例はまれであると思いますが、学生一人ひとりに卒業論文を通して素敵なドラマが産まれていることを願います。最後に最大の修学の機会として、学生のみなさんにはしっかりと卒業論文に取り組んでもらいたいと思います。

（人間科学部講師）

卒論指導あれこれ

市川 緑

人間科学部が創設された翌年二〇〇三年に本学に着任した。その秋から専門ゼミを担当し、一期生から今卒業する一〇期生まで、内地留学を挟んだ三年を除いて計七学年の卒業研究を指導したことになる。二〇一五年三月で退職するのを機に卒論について少し書いてみたい。

まず最初に驚いたのは人間科学部では卒業研究が必修になっているにも関わらず、提出期限が決まっているという事だ。遥か昔の自分の卒論提出期限は一月三十一日の一七時と決まっていた（未だに覚えている）、最寄駅から事務室に行くまでに開かずの踏切と呼ばれている踏切があり、「直前に提出しようとしたが、踏切が開かなくて一七時に間に合わず留年になった」という先輩の伝説をよく聞かされた。また、口頭試問は心理学研

究室の全教員の前で一名ずつ実施され、今年は何人泣いたかが話題となるほど厳しかった。それに比べると本学部では卒業研究の担当者が受け取り、期限までに成績をつけるだけである。口頭試問もないし、副査の制度もない。担当者が良しと言えば済むという誠におおらかな決まりである。

最初の年は、人間科学部の先輩の残した卒論がないことに戸惑った。一期生だから当たり前であるが、学生たちはもちろん卒論を見ることがないし、経済学部や経営学部の卒論は参考にできない。心理学関係の雑誌に掲載された論文は学部生には高度でハードルが高すぎる。卒論のイメージをつかんでもらうために、他大学で卒業研究の指導をしている先輩や後輩に頼んで、見学に行かせ

でもらった。十数人がぞろぞろとお邪魔したのだから先方には迷惑な話だが、どんなものを書けばよいのかというイメージを具体的に持つことができたようで、私は大いに助かった。

現在は二年生は各コースの実習科目を履修し、三年生になってから専門ゼミに所属するようになったが、当初は二年生の秋学期から専門ゼミに所属していた。つまり、二年半の間、担当教員と過ごしていた。先に学生は卒論のイメージがわからなかったと書いたが、実は私自身はゼミのイメージがわからなかった。自分が学生の時所属していた心理学研究室は小さくてゼミはなかったからである。文献を読んで発表したり、簡単な実験をしてレポートを書いたり授業はあったが、すべて別々の教員が担当していて、ゼミの先生と言える教員はいなかった。卒業研究の指導もその時々学生がそれぞれ勝手にお願いして指導を仰いでいた。だから複数の先生に教えていただいていた（ずっと同じ先生に相談していた学生もいたが、決まりはなかった）。そんなわけで、ゼミも開始前に何人かの先生に（これは学内で）見学させてもらった。こう書いてみると、たくさんの方々にお世話になってい

たのだなあと改めて感謝の念がわいてくる。言いたいことは、ゼミは学生にとっても教員にとっても多くの時間を共有するということである。

一期生のゼミ生は当初一六名いたが、私の不慣れのせいもあって、卒論を提出したのは一二名だった。一名は他のゼミへ移籍、もう一名は三年次終了時点で退学して保育士養成の短大に入りなおした。後の二名は留年である。ちよつと脱落（？）者の割合が高い。翌年ではなかったと思うが、しばらくして個別面談を始めた。ある先生から自分はこんな風に行っていると助言をもらって、さつそく実行したのである。ゼミ所属が決まってなるべく早い時点で、一人ずつ四五分間の面接を行った。臨床心理士である私にとっては得意分野である。人生の抱負でも卒論でやりたいことでも何でも自由に語ってほしいと伝えると、中には戸惑う学生もおおむね好評で、ずいぶん親密度が増したと思う。

卒業研究の内容については、テーマは自分が興味のあることでよいが、文献研究だけではなく、アンケートや実験、ヒアリングなど実証的な方法を用いたものということにした。そのような方法は、大学で取り組まない

その後の人生でやってみることはないかもしれないと思っただし、何か疑問に思ったことについてこうではないかと仮説を立ててそれを適切な方法で実証することは、ものの考え方としてさまざまに應用できると考えたからである。改めて一期生の題目を並べてみると、当時入学者の半分以上いた心理学専攻希望者の興味の一端がわかる(表1参照)。

なぜかゼミ生が三人しかいなくて他の先生と合同でゼミ合宿をした年があったり、卒業後もことあれば(なくても?)ゼミ同窓会をしている学年があったり、学年カラーはさまざまであるが私にとってはどの学生もかわいいう教え子であり、若いエネルギーをもらった元気の素である。三年前から一月三日のホームカミングデーに人間科学部同窓会が開催されているが、毎年でなくても三年に一回とか五年に一回でも構わないので開催が継続され、懐かしい顔と再会でできればこんな幸せなことではない。

(人間科学部教授)

表1 人間科学部 1期生(市川ゼミ)の卒業論文題名

1	保護者の行うしつけの変化—現在子育てをしている保護者の実態調査—
2	大学生を対象とした音楽聴取による気分変化—好みの音楽とリラクゼーション音楽を聴いて—
3	夢と現実—夢と現実がどのように影響しあっているか—
4	断酒会参加者の家族における共依存傾向の変容
5	大学生の対象喪失—男女の喪失感、持続時間、対処方法の違い—
6	乳児の顔の好み—月齢による違い—
7	自分はどのくらい大人だと考えるか—親世代と子供世代の大人イメージの違い—
8	心と身体つながり—心から身体への影響を防ぐことはできるのか—
9	世代による育児・しつけの違い—育児・しつけは世代から世代へと受け継がれるのか—
10	盲導犬使用者の社会適応と実生活における盲導犬受容について
11	現代人の精神志向性の強さについての考察—癒しとしてのシャーマニズム—
12	親子における世代間伝達—幼児期のしつけの仕方について—

